

明治十九年二月十九日 内務省 印刷

中田喜八類纂

現行
大日本
勅令
全書

明治十九年一月新刻



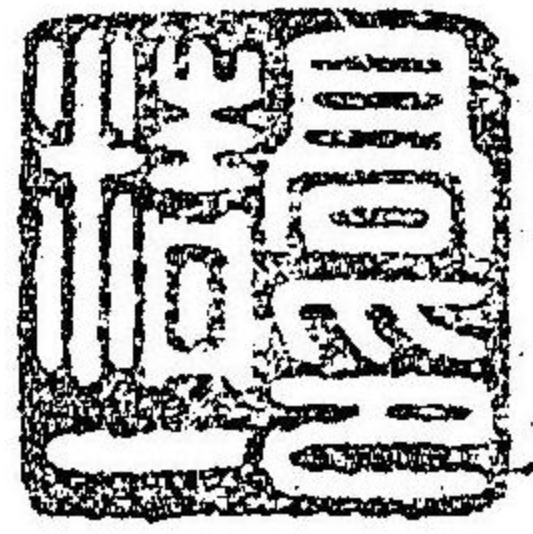
~~CZ~~ CZ
~~722~~ 711
~~D2~~ 0113

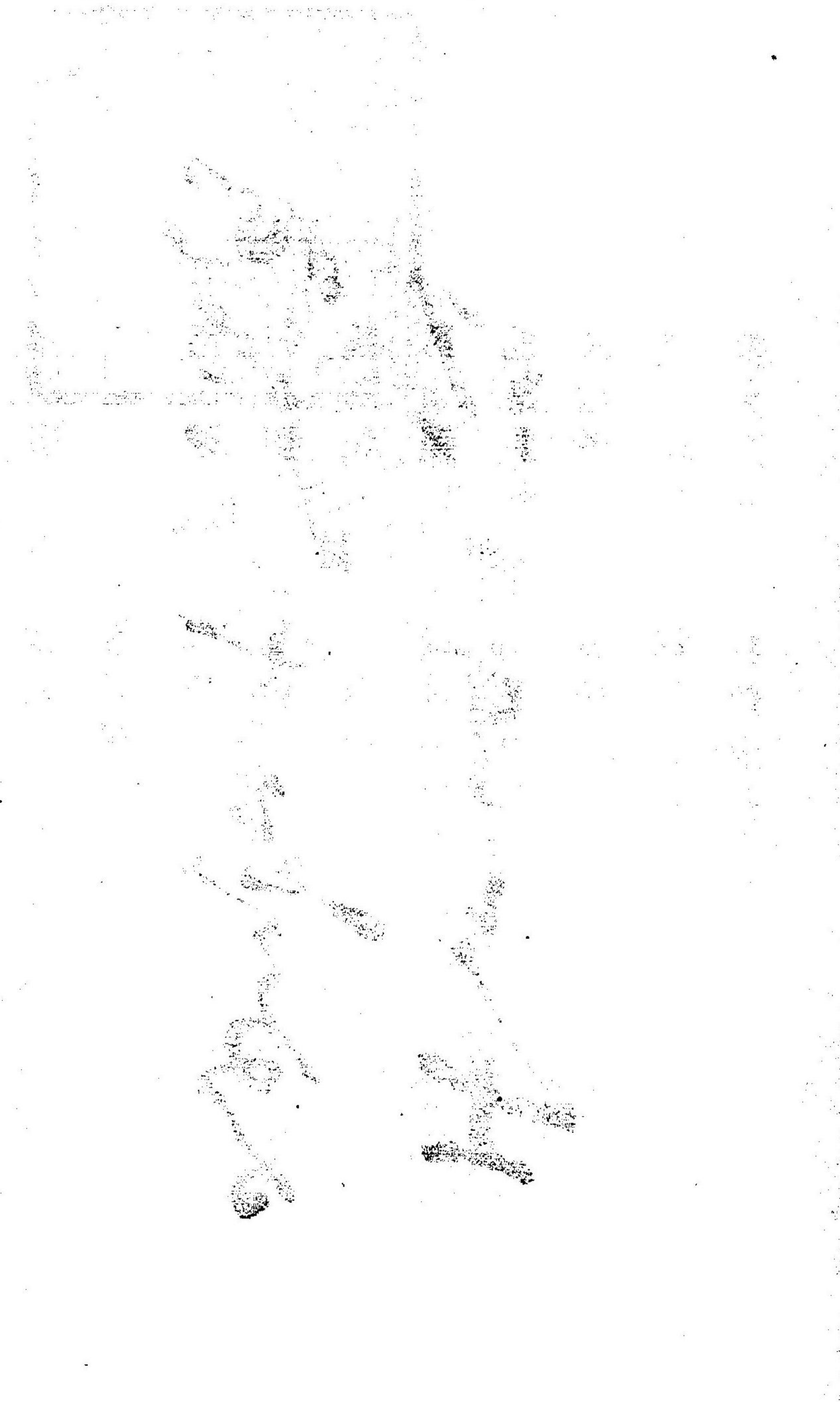
定海



市
子

市
子





現行 大日本勅令全書

中田喜八編纂

公益ニ關スル取締規則

總則

集會

出版

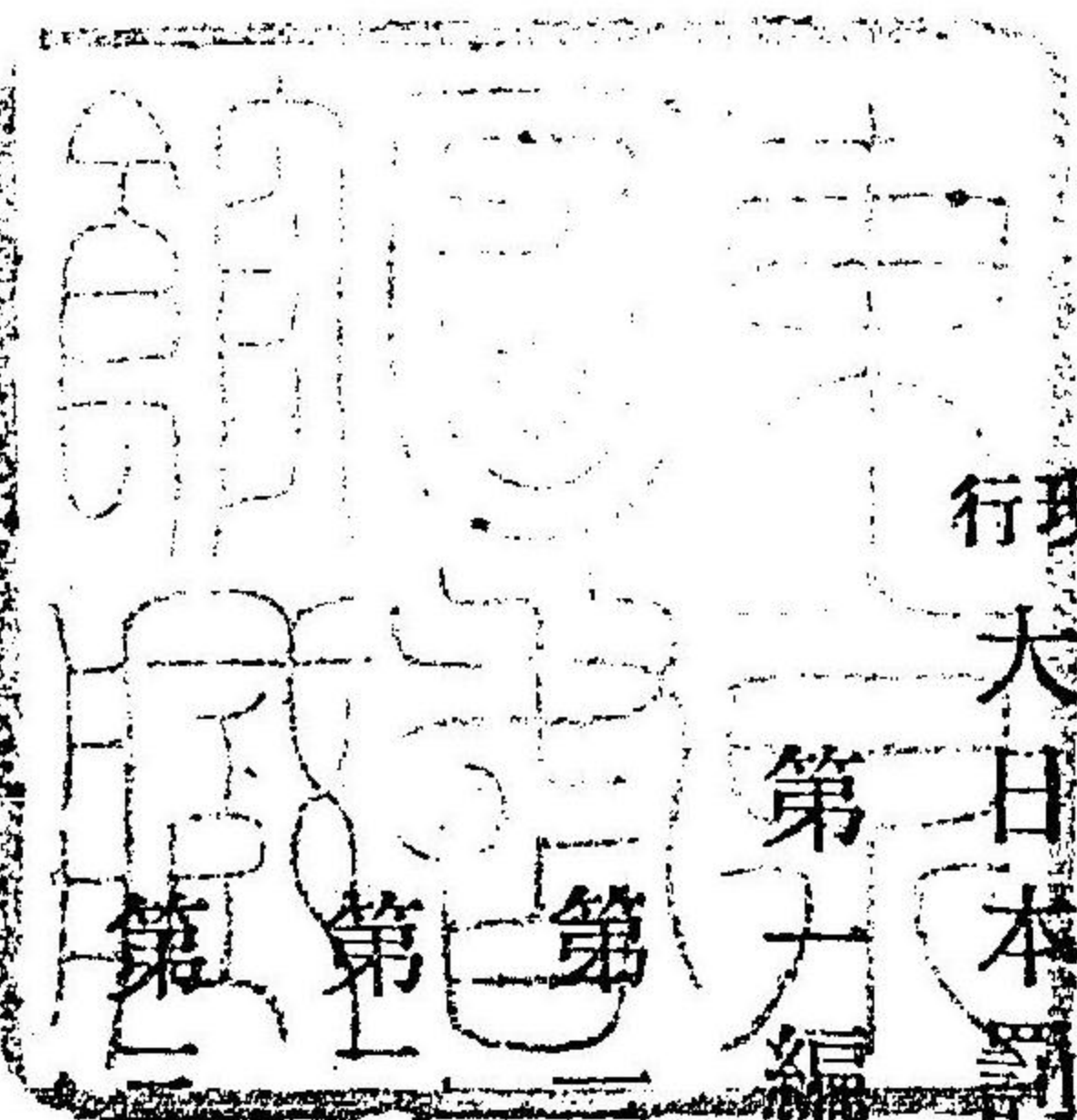
銃砲刀劍及火藥爆發物取締

土地欺隱

鐵道

電信

度量衡



第六編

第三類

第二類

第一類

第四類

第五類

第六類

第七類

第八類

第九類 贗造通貨

第十類 得遺失物

第十一類 富籤

第十二類 請願

第十三類 郵便

第二編 營業及公務收稅ニ關スル取締規則

第一類 總則

第二類 新聞

第三類 寫真

第四類 坑法

第五類 賣藥

第六類 毒藥劇藥

第七類 贗造藥品

第八類 鳥獸獵

第九類 石油取締

第十類 牛馬賣買規則

第十一類 徵兵令

第十二類 商業條例

第十三類 訴訟印紙稅則

第十四類 証券印稅

第十五類 酒造稅規則

第十六類 醬麴稅規則

第十七類 船稅規則

第十八類 車稅規則

第十九類 烟艸稅規則

第二十類 地券稅

第二十一類 醬油稅則

第二十二類 菓子稅則

第三編

健康及船舶並會社財產
有關スル取締規則

第一類 傳染病

第二類 阿片

第三類 船燈

第四類 難破

第五類 危害品

第六類 公債証書

第七類 株式

第八類 米商

第九類 古物商取締條例

第十類 質屋取締條例

第十一類 獸醫免許規則

第十二類 代言人規則

現行 大日本罰令全書

中田喜八編纂

第一編

公益及營業ニ關スル取締規則

第一類

總則

明治三十三年七月十四日
第五條

第五條

此刑法ニ正條ナクシテ他ノ法律規則ニ刑名

アル者

各其法律規則ニ從フ

若シ他

ノ法律規則ニ於テ別ニ總則ヲ掲ケサル者ハ

此刑法ノ總則ニ從フ

明治十四年十二月廿八日
第七十號布告

明治十五年一月一日ヨリ刑法施行候ニ付法律規則中

罰令ニ係ルモノ左ノ例ニ照シ處斷ス可シ

第一條 凡ソ懲役ハ十一日以上ヲ重禁錮ニ處シ十

日以下ヲ拘留ニ處ス

第一類

一類ノ一

一

一類

第二條 凡禁獄及ヒ禁錮ハ十一日以上ヲ輕禁錮ニ處シ十日以下ヲ拘留ニ處ス

第三條 凡罰金及ヒ科料ハ貳圓以上ヲ罰金ニ處シ二圓未滿ヲ科料ニ處ス

第四條 法ニ照ラシ律ニ照ラシ若クハ違令違式ニ照シ處斷ストアリ及ヒ咎申付ヘシトアルハ總テ貳圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

第五條 法律規則ヲ犯シタル者ハ刑法ノ再犯加重及ヒ數罪俱發ノ例ヲ用ヒス

第六條 法律規則中罰令アリト雖モ刑法ニ正條アル者ハ刑法ニ依テ處斷ス

第七條 前數條ノ罰ヲ犯シ拘留科料ニ處スル者ト

雖ヒ輕罪裁判所ニ於テ之ヲ裁判ス

但始審裁判所々在ノ地ヲ除クノ外ハ治安裁判所之ヲ裁判スルヲ得

右奉 勅旨布告候事

明治十四年十二月六日
第六十四號布告

明治十年一月第十三号布告府縣廳ノ條規ニ違犯スル者處分規則ノ儀ハ明治十五年一月一日ヨリ廢止ス
右奉 勅旨布告候事

明治十四年七月

刑法第四百三拾條

前數條ニ記載スルノ外各地方ノ便宜ニヨリ定ムル所ノ違警罪ヲ犯シタル者ハ其罰則ニ從テ處斷ス

明治十五年三月廿七日
丙第百一十一號達

十四年第六号布告
十三号布告
明三號布告
府縣廳ノ條規
規者處分規則
即者儀分明治
十五日ヨリ一月廢

止ス

一類ノ四

四

一類

大審院 裁判所

警視廳 府縣東京府

今般太政官ヨリ別紙之通御達相成候條此旨相達候事
別紙

司法省

勅任官禁錮ノ刑ニ該ル可キ罪ヲ犯シ及ヒ奏任官華族
帶勳有位ノ者禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ罪ヲ犯シタル
時ハ當該檢察官ヨリ司法卿ニ具狀シ司法卿其事由ヲ
奏聞シテ處分ス可シ但現行犯罪ニ係ル者ハ處分シテ
後ニ奏聞スルヲ得此旨相達候事

明治十五年三月二十二日

太政大臣三條實美

明治十四年八月三十一日
第七十四號ヲ以テ公達

刑法第四百三十條ニ依リ各地方ノ便宜ニ從ヒ違警罪
目ヲ定メ發行シタル時ハ之ヲ主務ノ省へ届出可シ此
旨相達候事

一類ノ五

五

一類

第二條第一
項十五年二
十七號布告
ニテ改正
加第二項追

第二類 集會

明治十三年四月五日

集會條例別冊之通被定候條此旨布告候事

別冊

第壹條 政治ニ關スル事項ヲ講談論議スル爲メ公衆ヲ集ムル者ハ開會三日前ニ講談論議ノ事項講談論議スル人ノ姓名住所會同ノ場所年月日ヲ詳記シ其會主又ハ會長幹事等ヨリ管轄警察署ニ届出テ其認可ヲ受ク可シ

第二條 政治ニ關スル事項ヲ講談論議スル爲メ結社等ヲ名義ヲ以テスルモ其實政治ニ關スル事項(十五年二十七日ヲ講談論議スル爲メ結合スル者ヲ併稱ス(號布告追加)スル者ハ結社前其社名社則會場及ヒ社員名簿ヲ管轄警察署ニ届出テ其認可ヲ受クヘシ其社則ヲ改正シ及

ヒ社員ノ出入アリタルトキモ全様タルヘシ此届出チ
爲スニ當リ警察署ヨリ尋問スルコトアレハ社中ノ事
ハ何事タリトモ之ニ答辨スヘシ

前項ノ結社及其他ノ結社ニ於テ政治ニ關スル事項ヲ
講談論議スル爲メニ集會ヲ爲サントスルトキハ仍ホ
第一條ノ手續ヲ爲スヘシ

第三條 講談論議ノ事項講談論議スル人員會場及會日
ノ定規アル者ハ其定規ヲ初會ノ三日前ニ警察署ニ届
出認可受ケルトキハ爾後ノ例會ハ届出ニ及ハスト雖
モ之ヲ變更スルキハ第一條ノ手續ヲ爲スヘシ

第四條 管轄警察署ハ第一條第二條第三條ノ届出ニ於
テ治安ニ妨害アリト認ムルトキハ之ヲ認可セズ又ハ
認可スルノ後ト雖モ之ヲ取消スコトアルヘシ

第四條改正
ノ分

第五條 警察署ヨリハ正服ヲ着シタル警察官ヲ會場ニ
派遣シ其認可ノ證ヲ検査シ會場ヲ監視セシムルコト
アルヘシ

警察官會場ニ入ルトキハ其求ムル所ノ席ヲ供シ且其
尋問アルトキハ結社集會ニ關スル事ハ何事タリトモ
之ニ答辨スヘシ

第六條第二
項追加ノ分

第六條 派出ノ警察官ハ認可ノ證ヲ開示セサルトキ講
談論議ノ届書ニ掲ケサル事項ニ亘ルトキ又ハ人ヲ罪
戾ニ教唆誘導スルノ意ヲ含ミ又ハ公衆ノ安寧ニ妨害
アリト認ムルトキ及ヒ集會ニ臨ムチ得サル者ニ退去
ヲ命ジテ之ニ從ハサルトキハ全會ヲ解散セシムヘシ
前項ノ場合ニ於テ解散ヲ命ジタルトキ地方長官東京
官視長ハ其情狀ニ依リ演說者ニ對シ一個年以内管轄内

ニ於テ公然政治ヲ講談論議スルヲ禁止シ其結社ニ係ルモノハ仍ホ之ヲ解社セシムルコトヲ得内務卿ハ其情狀ニ依リ更ニ其演説者ニ對シ一個年以内全國内ニ於テ公然政治ヲ講談論議スルヲ禁止スルコトヲ得

第七條 政治ニ關スル事項ヲ講談論議スル集會ニ陸海軍人常備豫備後備ノ名籍ニ在ル者警察官官立公立私立學校ノ教員生徒農業工藝ノ見習生ハ之ニ臨會シ又ハ其社ニ加入スルヲ得ス

第八條 政治ニ關スル事項ヲ講談論議スル爲メ其旨趣ヲ廣告シ又ハ委員若クハ文書ヲ發シテ公衆ヲ誘導シ又ハ支社ヲ置キ若クハ他ノ社ト連結通信スルコトヲ得ス

第九條 政治ニ關スル事項ヲ講談論議スル爲メ屋外ニ

於テ公衆ノ集會ヲ催スヲ得ス

第十條 第一條ノ認可ヲ受ケスシテ集會ヲ催スモノ會主ハ貳圓以上貳拾圓以下ノ罰金若クハ十一日以上三月以下ノ輕禁錮ニ處シ其會席ヲ貸シタル者並ニ會長幹事及ヒ其講談論議者ハ各貳圓以上貳拾圓以下ノ罰金ニ處ス第三條ノ規程ヲ犯シタル者モ亦本條ニ依ル

第十一條 第二條第一項ノ規程ニ背キテ届出ヲ爲サス又ハ尋問スル所ノ事項ヲ開答セサルトキ社長ハ二圓以上二拾圓以下ノ罰金ニ處ス詐欺ノ届出ヲ爲シ或ハ尋問ヲ得テ偽答スルトキ社長ハ右罰金ノ外尙ホ十一日以上三月以下ノ輕禁錮ニ處ス

正 第十一條改

正 第十二條改

第十二條 第五條ノ規程ニ背キ派出警察官ノ臨席ヲ肯セス又ハ其求ムル所ノ席ヲ供セサルトキ會主會長及

社長幹事ハ各五圓以上五十圓以下ノ罰金若クハ一月以上一年以下ノ輕禁錮ニ處シ警察官ノ尋問ニ答ヘス又ハ偽答スル者ハ全罪ニ處シ再犯ニ當ル者ハ拾圓以上百圓以下ノ罰金若クハ二月以上二年以下ノ輕禁錮ニ處ス

第十三條 派出所ノ警察官ヨリ解散ヲ命シタル後尙退散セサル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金若クハ十一日以上六月以下ノ輕禁錮ニ處ス

第十四條 第七條ノ制限ヲ犯シタルトキ會主會長及ヒ社長幹事ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金若クハ十一日以上三月以下ノ輕禁錮ニ處ス其他情狀ノ重キモノアレハ其社ヲ解散セシム其制限ヲ犯シテ入社シ又ハ臨會スル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

第十五條 第八條ノ制限ヲ犯シタルトキ會主會長及ヒ社長幹事ハ五圓以上五十圓以下ノ罰金若クハ一月以上一年以下ノ輕禁錮ニ處シ其社ヲ解散セシム此事ニ關スル者モ亦全罪ニ處シ脅迫スル若及ヒ罪再犯ニ當ル者ハ拾圓以上百圓以下ノ罰金若クハ二月以上二年以下ノ禁獄ニ處シ其社長幹事ハ一年以上五年以下結社又ハ入社ヲ禁ス

第十六條改

第十六條 學術其他何等ノ名義ヲ以テスルニ拘ハラテ多衆集會スル者警察官ニ治安ヲ保持スルニ必要ナリト認ムルトキハ之ニ臨監スルコトヲ得若シ其臨監ヲ旨セサルトキハ第十二條ニ依テ處分ス
學術會ニシテ政治ニ關スル事項ヲ講談論議スルコトアルトキハ第十條ニ依テ處分ス

第十七條以下追加

二類ノ八

十四

二類

第十七條 前條ノ場合ニ於テ治安ヲ妨害スト認ムルト
キハ第六條ニ依テ處分ス

第十八條 凡ソ結社若クハ集會スル者内務卿ニ於テ治安ニ妨害アリト認ムルトキハ之ヲ禁止スルコトヲ得
若シ禁止ノ命ニ從ハス又ハ仍ホ秘密ニ結社若シクハ
集會スル者ハ拾圓以上百圓以下ノ罰金若シクハ二月
以上二年以下ノ輕禁錮ニ處ス

第十九條 成法ニ制定スル所ノ集會ハ此限ニ在ラス
明治十三年四月十六日
大政官第五十六號布告

本年四月第拾二號布告集會條例第六條へ左ノ通但書追加候條此旨布告候事

但本條ノ解散ヲ命シタル時ハ其情狀ニヨリ東京ハ
警視長官其他ハ地方長官其結社ヲ解散セシメ又ハ

其管轄内ニ於テ壹箇年以内其會員ノ公衆ニ對シ政

事ヲ講談論議スルコトヲ禁スルヲ得ヘシ

明治十三年四月十六日
大政官第五十六號布告

今般第十二號布告ノ通集會條例被定候ニ付テハ從前
集會結社候者モ右條例ニ依リ更ニ届出ヘシ此旨布告
候事

明治十五年六月七日
内務卿第七百六號達

警視廳
府縣東京府
ヲ除ク

今般第二十七號ヲ以テ集會條例改正追加布告相成候
ニ付テハ從前己ニ結社ノ届ヲ爲セシ者及ヒ届洩ニ相
成居候モノトモ該布告ニ據リ至急可爲届出此旨相達
候事

明治十三年五月五日
陸軍省第七百二十二號達

二類ノ九

十五

二類

今般集會條例御發行相成候ニ付テハ陸軍軍人並ニ諸生徒ニシテ右條例ノ制限ヲ犯ス者ハ總テ地方裁判所ノ處分ニ屬スル儀ト可相心得此旨相達候事

明治十三年乙酉二月十二日
陸軍省第八號達

諸生徒並下士兵卒演說講談會等へ聽聞ノ爲メ罷越候儀ハ不相成等ニ候處近來竊ニ右等ノ場所へ立入候者モ有之哉ニ相聞へ不都合ノ事ニ候條自今心得違ノ者無之樣嚴重相達可申此旨相達候事

明治十一年七月十九日
政治官第一號達

內務省
府縣

近來地方ニ於テ國事政體ヲ談論スルノ目的ヲ以テ何某社ト稱シ或ハ演說會ヲ開キ多衆聚合スル者有之趣相聞へ右ハ警察官ニ於テ視察ヲ加へ萬一其舉動民心

ヲ煽動シ國安ヲ妨害スルニ涉リ候者ト看認候節ハ東京府下ハ警視長官各地方ハ其長官ヨリ令禁止其事情ヲ具へ內務卿へ可届出此旨相達候事

明治十四年五月
司法省達

諸局課

今般別紙之通り御達相成候ニ付此旨ヲ體シ一同不都合無之樣可心得候事

但各員請書爲差出局課長ニテ取纏メ申牒可致事

司法卿大木喬任

別紙

凡ソ官吏タル者其職務ニ係ル外政談講學ヲ目的トシテ公衆ヲ聚メ講談演說ノ席ヲ開ク等不都合ノ儀ニ付右等之義無之樣各長官ニ於テ取締可致此旨相達候事

明治十二年五月九日

太政大臣三條實美

明治十五年十二月二十日
第七十七號布告

府縣會議員會議ニ關スル事項ヲ以テ他ノ府縣會議員ト聯合集會シ又ハ往復通信スルヲ許サス
其集會スル者何等ノ名義ヲ以テスルモ府知事縣令ニ於テ此禁令ヲ犯ス者ト認ムル時ハ直ニ解散ヲ命ス可シ

前項ノ場合ニ於テ解散ノ命ニ從ハサルモノハ集會條例第十三條ニ依テ處分ス

右奉 勅旨布告候事

第三類 出版

明治八年九月三日
百三十五號布告

明治五年正月文部省布達出版條例相廢シ更ニ別冊之通相定候條此旨布告候事
別冊

出版條例

第一條

圖書ヲ著作シ又ハ外國ノ圖書ヲ翻譯シテ出版セントスル者ハ出版ノ前ニ内務省ヘ届ケ出ツヘシ
但シ社則塾則引札ノ類印刷シテ發賣セサル者ハ此例ニアラス

第二條

圖書ヲ著作シ又ハ外國ノ圖書ヲ圖譯シテ出版スルハ

ハ三十年間專賣ノ權ヲ與フヘシ此ノ專賣ノ權ヲ板權ト云フ

但シ板權ハ願フト願ハザルトハ本人ノ隨意トス故ニ板權ヲ願フ者ハ願書ヲ差出シ免許ヲ請フヘシ其願ハサル者ハ各人一般ニ出版スルヲ許ス

第三條

出版屆版權願トモ草稿ヲ添ルニ及ハスト雖モ時トシテハ草稿ヲ徴シ検査スルヲアルヘシ

第四條

草稿又ハ納本ヲ検査シテ世治ニ害アルト認ムルキハ其出版又ハ販賣ヲ禁シ或ハ刻版ヲ毀タシムルヲアルヘシ

第五條

出版屆版權願トモ其所在ノ地方廳本籍又ハ寄居ノ地方廳ヲ經由スヘシ

但シ著譯者出版人其管轄ヲ異ニスル者ハ出版人所在ノ地方廳ヲ經由スヘシ

第六條

圖書ノ特ニ世ニ鴻益アル者ハ板權ノ年限終ルノ後仍ホ十五年ノ延期ヲ許スヲアルヘシ

第七條

板權免許ノ爲ニ其年限ヲ記セル証書ヲ附與スヘシ年限終ルノ後ハ各人一般ニ出版スルヲ許ス

第八條

著譯書大部ニシテ卒業數年ニ二リ編ヲ逐ヒ漸次出版スル者ハ每次ニ板權ヲ與ヘ年限ヲ起算スヘシ

第九條

他人ノ著譯書已ニ板權ヲ有スルモノヲ續成セント欲スル者ハ原主ニ示談ノ上連印ノ願書ヲ出スヘシ其原主死去セル時ハ相續人ヲ以テ原主ト見倣スヘシ

第十條

他人ノ著譯書板權ヲ有スルモノヲ校訂シ或ハ節略シ或ハ註解附録繪圖等ヲ加ヘテ出版スル者モ亦原主ノ承諾ヲ得サルヘカラス其出願ノ手續ハ前條ニ依ルヘシ

第十一條

既ニ板權ヲ有スル自己ノ著譯書ヲ校訂シ或ハ節略シ或ハ註解附録繪圖等ヲ加ヘテ出版スルトキハ更ニ願ヒ出ルニ非レハ板權ヲ得ヘカラス其製本ノ式ヲ改メ

若クハ冊數ヲ分合シテ改版スルニ止リ若クハ舊式ニ依テ再刻スル者ハ板權ヲ存ス

但シ屆書出シ製本ヲ納ムルハ各本條ニ依ルヘシ

第十二條

著譯者死後ニ至リ其相續人遺稿ヲ出版スルヲ得其板權ヲ願フトキハ之ヲ與フヘシ

第十三條

板權年限未タ終ラサルノ間ハ版主ノ相續人ニ傳フヘシ

但シ板權讓受ノ由テ相續人ヨリ内務省ヘ届ケ出ヘシ

第十四條

他人ノ著譯書ヲ出版スル者ハ必ス著譯者ノ承諾ヲ得

へシ其權板願書若クハ出版屆書ニハ必ス著譯者ト連
印スへシ

第十五條

板權ヲ得タル者ハ它人其條章ヲ剽竊スルヲ許サス
但シ論辨若クハ証明スルタメニ引用スル者ハ此例
ニアラス

第十六條

同時若クハ前後ニ偶然同様ノ圖書ヲ著譯シ板權ヲ願
フ者二人以上アルトキハ共ニ板權ヲ與フへシ其事情
明白ナラザル者ハ事由ヲ檢査シテ後チ之ヲ許シ或ハ
許サ、ルへシ

第十七條

外國ノ圖書既ニ甲者ノ成譯アリトイへヒ乙者又之ヲ

譯シ甲者ノ誤謬ヲ正シ又ハ闕漏ヲ補ヒ及ヒ其文意ヲ
シテ一層明瞭ナラシムルノ確證アルモノ板權ヲ願ヒ
出ル時ハ檢査シテ後チ之ヲ許シ或ハ許サ、ルへシ

第十八條

著譯ノ圖書同名ノ者アリト雖ヒ文理不全ナルニ於テ
ハ坊ケナシトス
但表題ノ上ニ 何某ト記載スへシ

第十九條

出版ノ圖書ハ内務省ニ於テ目錄ヲ作り時々公布スへ
シ

第二十條

圖書刻成ノ上ハ製本三部ヲ内務省ニ納ムへシ其版權
ヲ得ル者ハ外ニ免許料トシテ製本六部ノ定價ヲ納ム

納本セス及免許料ヲ出サミル前ハ發賣ヲ許サス
但シ出版ノ上每部定價ノ印ヲ押スヘシ

第二十一條

出版ノ圖書ニハ著譯者ノ住所氏名ヲ記ス著譯者ノ主
名ヲ知ルヘカラサル者ハ其由ヲ記スヘシ而シテ何年
月日出板或ハ何年月日板權免許ト記シ板主ノ住所氏
名ヲ記スヘシ氏名ヲ記セス別号ヲ記スルコトヲ得ス
板權ヲ相續シ若クハ賣買シ若クハ分板シタルキハ相
續人買主及分板ヲ受ケタル者ノ住所氏名ニ改ムヘシ

第二十二條

板權ノ賣買ハ勝手タルヘシ賣買スルヒハ雙方連印ヲ
其由ヲ内務省ヘ届ケ出ヘシ

第二十三條

板權ヲ分テ讓リ若シクハ賣リ同一圖書ヲ各自ニ出版
スルト妨ケナシ之ヲ分版ト名ク
但シ雙方連印シテ届ケ出ルト前條ノ如シ

第二十四條

版權ヲ相續シ若シクハ賣買シ若クハ分版シ及ヒ改版
ノ届ケ出サル者ハ其版權ヲ失フヘシ

第二十五條

願濟ノ表題ヲ變改シ若クハ納本ノ後ニ新クニ序跋ヲ
加フル者ハ其趣ヲ届出テ更ニ納本スヘシ若シ届出テ
ス又ハ納本セサル者ハ其板權ヲ失フヘシ

第二十六條

免許狀ヲ失フ者ハ其趣ヲ届出タル上更ニ之ヲ與フヘシ

但手数料トシテ製本三部ノ定價ヲ納ムヘシ

第二十七條

小説歌謠ヲ出版スル者亦此ノ條例ニ從フヘシ

第二十八條

彫畫ノ類ハ出版スル毎ニ届ケ出ルル第一條ニ依ルヘシ

但シ板權ヲ與ヘス

第廿九條

九年第十二號布告ヲ以テ追加ス

板權免許附與ノ後板權賣買或ハ改題等届出ノ上雛形ノ通藏板人免許狀へ地方廳印ヲ請フ可シ

第三十條

同上

裏書餘白ナキニ至テハ更ニ免許狀書換ヲ願出可シ

但願出ル者ハ手数料トシテ製本三部ノ定價ヲ納ム

ヘシ

第三十一條

九年第八十一號布告ヲ以テ追加ス

都合ニ因リ板權ヲ要セサル旨ヲ以テ免許狀返納スル者ハ手数料トシテ金三十錢ヲ納ム可シ

但収納方ハ免許料ト同様タル可シ

出版條例罰則

第一條

内務省へ届ケスノ圖書ヲ出版シ及ヒ板權免許ヲ得スマ免許ノ名ヲ冒ス者若クハ納本セス及免許料ヲ出サスマノ發賣スル者ハ其刻板印本及賣得金ヲ沒収ス

第二條

凡ソ偽板ヲ作り或ハ書中ノ字句及繪圖ノ摸樣ヲ小變

シ若クハ少加ノ其表題ヲ改メ其他総テ他人ノ板權ヲ侵メ出版スル者ハ罰金二十圓以上三百圓以下ヲ科シ其刻板印本及賣得金ハ沒収シテ板主ニ給付ス

第三條

第一條及ヒ第二條ヲ犯スノ圖書タルヲ知テ之ヲ發賣スル者ハ罰金五圓以上百圓以下ヲ科ス其第二條ヲ犯スノ圖書タルヲ知テ發賣スル者ハ現存ノ圖書及賣得金ヲ沒収シテ板主ニ給付ス

第四條

無名若クハ板主之住所ヲ記サザルノ圖書ヲ出版シ若クハ發賣スル者并ニ變名偽名シ若クハ住所ヲ偽リテ圖書ヲ出版シ若クハ情ヲ知テ發賣スル者ハ禁獄十日以上六月以下ヲ科ス

但シ沒収ノ法ハ第一條ニ依ル

第五條

凡ソ著譯ノ圖書讒謗律及新聞紙條例第十二條以下ヲ犯ス者ハ著譯者其罪ニ坐ス

但シ著譯者ハ首ヲ以テ論シ出版者ハ從ヲ以テ論ス

第六條

淫褻俗ヲ乱ルノ圖書小説 歌謡 戯曲 畫ノ類ヲ著譯シテ出版スル者ハ禁獄三十日以上一年以下罰金三圓以上百圓以下ヲ科ス

第七條

法司圖書犯則ノ訴ヲ受レハ即時刻版及現存ノ印本ヲ勾収セシメ論決スルニ至テ官ニ沒ス
活版ヲ用フル者ニシテ出版人自ラ印刷ヲ管スル者若

シハ付スル所ノ印刷人犯情ヲ知ル者ハ印刷器ヲ沒収ス

第八條

既ニ版權免許ヲ得ルト雖モ出版ノ上犯則ニ涉ル者ハ仍ホ本條ニ依リ罪ヲ科ス

附則

一此條例發行ノ日ヨリ出版ニ關スル從前ノ布告布達等一切取消シ候條從前出版ノ圖書ハ此條例發行ノ日ヨリ四ヶ月ヲ限リ此條例ニ準據シ更ニ願出ツヘク右限内願出サルモノハ總テ版權無之儀ト心得ヘシ

一從前出版ノ圖書ト雖モ版權願出ルニ於テハ免許料上納スヘシ

但シ製本ハ納ムルニ及ハス

一自今院省使應府縣ニ於テ出版スルモノト雖モ布告公文及誤廳ニ關スル日誌規則ノ類ヲ除クノ外ハ必ス内務省ヘ届ケ出ツヘシ

明治八年十一月五日第百六十一號布告改正ノ分

出版届若シハ出版々權願書式用昏美濃紙

出版御届版權願書式何冊大小寸法

一書名 何年何月出版内何冊ハ何年何月出版

右ハ私何人誰著何々ノ事記載翻譯ナレハ私以下ニ何

年何國何氏著何ト題シ何々ノ事記載翻譯ニナレハ私以下ニ何

私何人誰 翻譯致シ一切條例ニ背キ候儀無之候間今度

他何人誰 翻譯致シ一切條例ニ背キ候儀無之候間今度

也〔版下ニ代ナルニ下此文ヲ此用フ以〕猶版權免許奉願候也

何年月日

何縣府

何族籍

何誰印

住所

同上

何誰印

同

全上

何誰印

全

他人ノ著譯
書ヲ出版ス
ルニ於テハ

譯著者

出版人

內務卿某殿

前書ノ通願出候ニ付進達候也

何年月日

何縣府知事某印

既刻圖書版權願書式用紙美濃紙

版權御願

一書名

何冊大〔繪レハ〕大小寸法

右ハ私誰著何々ノ事ヲ

記載述代譯ルナレハ私以下用フニ何

年何國何氏著何ト題シ何々ノ事ヲ

記載述セル原書ヲ

私誰先何誰

翻譯致シ去ル何年何月出版致シ候モノニシテ一

切條例ニ背キ候儀無之候間此度版權免許奉願候也

何縣府

何族籍

何誰印

住所

何年月日

全上

三類ノ十八

譯著書

他人ノ著譯
書ヲ出版スルニ
於テハ

三十六

何誰印

三類

同上

全

何誰印

全

出版人

內務卿某殿

前書ノ通願出候ニ付進達候也

何年月日

何縣知事某印

他人ノ著譯書ヲ續成シタル出版届書若クハ出版々權願
書式用帛美濃紙

出版御届版權御願ト記スヘ出版

一書名

何冊大繪レハ圖大小寸法原何冊

何年何月出版内何冊ハ何年何月出版

右前何冊編ハ何誰著何々ノ事ヲ論記載以翻譯ニナレハ何誰
交フ何年何國何氏著何ト題シ何々ノ事ヲ論記載セル
原書ヲ何誰翻譯致シ何年月出版此版權ニ得シモノニハ
フ加免許ヲ受ケ候處右何誰故障アリテ後編成功ノ
目途ナキニ因リ何私誰後何冊ヲ續譯致シ一切條例ニ
背キ候儀無之候間今度示談ノ上出版致度此段御届
申上候也版權ニ代フル下交ハ此段以猶版權免許奉願候也
何年月日 何縣府

何族籍

前何冊編板主死後人ナレハ

何誰印

住所

全上

後何冊記者著

何誰印

三類ノ十九

三十七

三類

〔他者ノノ著譯ヲ記書シテ出版スルニ出於テハ同名ヲ以テ主并著〕

同上

出版人

何誰印

内務卿某殿

前書ノ通願出候ニ付進達候也

何年月日

何縣知事某印

他人ノ著譯書ヲ校訂シ或ハ節畧シ或ハ註解附録繪圖等ヲ加ヘタル出版屆書若クハ出版々權願書式用紙美濃紙

出版御届版權御願トフ記スヘ出版

一書名

何冊大繪圖ナ大小寸法

何年月出版内何冊ハ何年月何月出版

右原書何誰著何々ノ事ヲ論載ニ翻譯フルレニ河文ヲ以下

何年何國何氏著何ト題シ何々ノ事ヲ記載セル原書ヲ何誰翻譯致シ何年月出版ニ版權ヲ得ニシモノハ此間免許ヲ受ケ何誰所持候處今度何誰校訂附録繪圖ヲ加ヘ一切條例ニ背キ候儀無之候間今度示談ノ上出版致度此段御届申上候也〔版權ニ代アル下片ハ此用ヲ以猶版權免許奉願候也〕

何年月日

何縣府

何族籍

原書板主死後相續ト人レ

何誰印

全何上

校訂附録者

誰印

他人并校訂注解除者ノニ係ル書ヲ出版スルニ出於テハ同名ヲ以ス

出版人

何誰印

内務卿某殿

前書ノ通届出候ニ付進達候也

何年月日

何縣府知事某印

版權買受讓分版届書式用紙美濃紙

一書名何誰著
版權買受讓御届

何册大小〔繪レハ圖大小寸法〕

右ハ何年月版權免許ヲ得テ何誰所持候處今度示談
ノ上何誰買受讓候ニ付〔版主死去相續人受讓片ハ今度
何月何日全人死去私版權相續致候ニ付〕此段御届申
上候也

何年月日

何縣府何族籍

賣主ハ分版主又

何誰印

住所

全上

買主版或ヲハ受主又モハ分

何誰印

全

版主死去相續人受繼テス者
ハ獨リ其者ノ名ヲ以テス

全上

版權相續人

何誰印

全

内務卿某殿

前書ノ通届出候ニ付進達候也

何年月日

何縣府知事某印

甲既ニ成譯シテ出版セル圖書ヲ乙又譯シテ出版

スル届書若クハ出版々權願書式用番美濃紙

一書名 出版御届版權御願トフ記スハ出版

何冊大〔小〕ハ圖大小寸法

何年何月出版〔内何冊ハ何年何月出版〕

右、既ニ何誰成譯出版々權免許有之候ハ私誰今
度新譯致シ前譯ノ誤謬ヲ訂正シハ或ハ欠漏ヲハ補明
瞭ニ一切條例ニ背キ候儀無之候間御檢査ノ上出版
致度此段御届申上候也〔版ニ權代ヲ願ニ下文ハ此役ヲ以猶版
權免許奉候也〕

何年月日

何縣府

何族籍

何年月日

何誰

住所

譯者

全上

何誰印

他人ノ譯書

ヲ出版スルニ於テハ

全

全上

何誰印

出版人

同

内務卿某殿

前書ノ通願出候ニ付進達候也

何年月日

何縣府知事

某印

版權免許證書式

三類ノ二十六

第何號

四十四

三類

圖書頭

板權免許之證

検査主任之印

何誰ノ印

書名

何冊

何縣府 何族籍

何誰藏版

版權免許之證

右者明治 年 月 日ニリ向三拾年間板權免許候也

明治 年 月 日 内務卿 某

内務卿 某之印

九年第十ニ號布告

板權賣買若シハ改題等ノ節免許狀ニ裏書々式

免狀

裏書

表書	免狀
板權免狀賣渡候也	
何年何月日何之誰印	
族籍 何ノ誰殿	

免狀

裏書

何年 何月日改題	免狀
書名	

明治八年九月第三十五號布告

明治八年九月第三十五號布告出版條例中ニ第三十一條追加候條此旨布告候事

三類ノ二十七

四十五

三類

第三十一條

都合ニ因リ板權ヲ要セサル旨ヲ以テ免許狀返納スル
者ハ其手數料トシテ金三十錢ヲ納ムヘシ

但収納方ハ免許料ト同様タルヘシ
太明治八年六月廿八日
政官第百十二號布告

文部省管理衛生准刻二項ノ事務內務省へ管理被仰付
候條右ニ關スル願伺等ハ從前規則ノ通相心得自今內
務省へ可差出此旨布告候事

內明治八年十月二十八日
務省甲第百二十號布達

今般第百三十五號布告出版條例改正ニ付テハ從前發
行セシ圖書ト雖モ淫褻俗ヲ亂ルモノ及ヒ新聞條例第
十二條ヨリ第五四條迄ニ係ルモノハ來明治九年八月
卅一日限リ發賣差止候條此旨布達候事

明治八年十一月二十九日
內務省甲第百二十一號布達

出版願届書ノ氏名從前族籍ノニ肩書致シ候處自今官
位アル者ハ族籍并官位ヲモ記入シ可差出此旨布達候
事

明治八年十一月十五日
內務省甲第百四十九號布達

本年七月太政官第百二十四條ヲ以テ新聞紙及時々刷出
スル雜誌雜報ノ類納方儀公布之處中ニハ不納ノ向キ
モ有之不都合ニ候條自今刷出スル毎ニ必ス可相納旨
管內右營業ノ者へ普ク布達可致此旨相達候事

明治八年十一月廿日
內務省甲第百二十一號布達

但舊准刻事務圖書寮管理ニ付自今同察へ可相納事
圖書刻成致納本候節其所在地方廳ヲ經由セス本入ヨ
リ直ニ納付ノ向ハ其旨趣并ニ納本ノ定價等速ニ其地

方廳へ可届出此旨布達候事

但板權免許料ノ儀ハ必ス地方廳ヲ經由可差出候事
第明治八年十月十二日官國幣社部省甲
圖書出板之儀ハ本年第三百三十五號公布之趣モ有之候

得共各社祭神考縁起書神徳記等之類ニ限リ今般出板
致度者ハ一應當省へ稿本差出シ檢閲ヲ經候上内務省
へ可届出候此旨爲心得相達候事

明治八年内務省乙第百
十一號ヲ以府縣へ達

今般第三百三十五號ヲ以テ版權條例公布ニ付板權免許
狀附與候者ヨリ免許料收納方之義七月ヨリ十二月迄
ノ分ハ翌年三月限リ一月ヨリ六月迄ノ分ハ九月限リ
當省へ可相納明細簿之儀ハ別紙雛形之通取調七月ヨ
リ十二月迄ノ分ハ翌年二月限リ一月ヨリ六月迄ノ分

ハ八月限リ正副二帳可差出此旨相達候事

常用罫紙

雛形

尙年七月ヨリ十二月マテ板權免許料收納金明細帳

何府族籍

一金何程 藏板人 何 誰

何年月日免許

書名 六部代

壹部 何册

但 同原價 何程

同

一金何程 同上 同上

同上

同

但 同 同 同

合金何程

右者何年一月ヨリ六月マテ
板權免許料收納高書面
之通相違無之候也

何年月日

内務卿宛

縣長官印

明治八年十二月二十四日
内務省
第百七十號ヲ以テ府縣へ達シ

圖書板權ヲ有スルモノハ別ニ版權書目ヲ編成シ發行
可致ニ付各廳從前藏板ノ分并自今出版共翻刻ヲ許サ
ル圖書ハ一々可届出此旨相達候事
明治九年五月九日
内務省
第百七十號ヲ以テ府縣へ達シ

昨八年乙第百三十一號ヲ以版權免許料收納方之儀相
達置候處右金圓ハ本年九月納ノ分ヨリ直ニ租稅察へ
相納明細簿ノ儀ハ從前ノ通正副二帳共當省へ可差出
此旨相達候事

但昨八年七月ヨリ九年六月迄之分ヲ八年分トシ以
降之レニ準シ可相納事

明治九年五月九日
内務省
第百三十五號ヲ以テ府縣へ達シ

明治八年當省乙第百三十一號及本年乙第四十七號達
版權免許料收納方諸稅收入方同一ニ無之大藏省ニ於
テ皆濟仕上ク等差支候ニ付本年一月ヨリ六ヶ月分取
纏メ其日ヨリ十五日以内ニ該地差立租稅察へ可相納
明細簿ハ其前當省へ可差出此旨更ニ相達候事
但本年七月以降ノ分モ本文ニ準シ可相納事

明治九年五月二日內務省

客歲九月御布告相成候出版條例第二但書ニ其願ハサ
ル者ハ各人一般ニ出版スルヲ許スト有之候得共出版
届之儀ハ必ス當省ニ可届出儀ト可相心得此旨布達候
事

明治九年五月十五日內務省
第六十一號ヲ以府縣ニ達

明治八年太政官第三百三十五號御布告出版條例附則第
三款之通官版ノ圖書出版候節ハ必ス當省ニ可届出儀
ノ處區々相成不都合ニ候條自後出版ノ前別紙雛形ニ
照準シ可届出儀ト可相心得此旨相達候事
雛形

院省使廳府縣出版雛形

用紙美濃紙

出板届出板權板權届ト記スハ

一書名

何冊大(給)レハ圖大小寸法

何年何月出版(或ハ何冊内何冊ハ何年何月出版

右ハ何誰編輯何々ノ事ヲ記述ニ代ルニレハ右ヲ以下

何年何國何氏著何ト題シ何々ノ事ヲ記述セル厚

書ヲ何誰翻譯致シ今般當院省使ニ於テ出版致シ

度尤(版權ヲ有スル片ハ致度以尤板權ヲ有シ候條)

此段及御届候也

何年月日 何院省使廳府縣長次官印

內務卿某殿

明治九年五月廿五日內務省

凡新刻ノ圖書板權ヲ有シ度者ハ出版々權共合セテ可
願出若シ出版届ノミ差出後日ニ至リ版權願出候共授

與不致候條此旨布達候事

明治九年七月十日內務省
甲第九年七月十日內務
第百三十三號布達

昨八年太政官第三百三十五號出版條例御布告以降ヨリ
本年五月當省甲第二十號布達迄ノ際出版ノミ届出候
圖書ハ來ル十月三十一日限版權可願出若シ右期限間
願出ザルモノハ後日ニ至リ願出候共授與至カス候條
此旨布達候事

明治九年七月二十五日內務省
甲第九年七月二十五日內
第百二十七號布達

明治八年十月ヨリ本年五月迄版權所有ノ書目別冊之
通ニ候條此旨相達候事

別冊畧ス

明治九年八月八日內務省
甲第九年八月八日內
第百三十號布達

版權免許ノ儀所在ノ地方廳ヲ經由シ免許ヲ得テ後他

ノ府縣ニ所屬換或ハ轉住寄留換等ニ付藏板持轉スル
者ハ別紙書式ニ準シ舊新兩地方ヲ經テ當省へ可届出
此旨布達候事

但他府下ノ者へ版權賣渡ノ者モ出版前後ニ拘ラス

書式ニ準シ届出ヘキ事

書式用紙美濃紙舊地方へ

藏版持轉御届出版前ノモ記スハ移轉

一書名 何冊

右何年月日版權免許ヲ受テ所持候處此度何地方
へ所屬轉換致シ藏版持轉出版前ノ者ハ藏板以下該
地方ニ於テ出版同府へ免許料上納候ニ付此段御
届申上候也

何縣 何族

何年月日

何誰印

內務卿某殿

府縣與書出版届ニ同シ

新地方へ

藏版持轉御届出版前ノ記者スハ移轉出

一書名 何册

右何府縣ヲ經テ何年月日版權免許ヲ受テ所持候處

此度何府縣へ所屬轉換致シ何地所へ藏版持轉出版前

ニ同地所以下ヲ用ニ代何地所ニ於テ出版同府縣へ免許料

上納候ニ付此段御届申上候也

何府縣何族

何年月日

何誰印

內務卿某殿

與書同前

乙明 治三十九年十一月十一日以内務省

先前ヨリ明治八年十二月迄各地方ニ於テ出版セシ書

籍圖書官版私版トモ現今所持ノ分悉皆取調別紙雛形

ノ通記載致サセ各管轄廳ニ於テ取纏來明治十年三月

限リ當省へ可差出此旨相達候事

美濃紙ヲ用フ 雛形

藏版御届

氏名何著譯編或ハ何

書名 活木板

何府縣 藏板

何年月日出版

モ板權ハアル何年月日版權所有

同前 何府縣何國何郡何村何番地

書名

同前

何學校 藏版

何年月日出版(社寺或ハ結社藏版モ之ニ做フ)

(板ノ概有ル)何年月日版權免許

何府縣華士族平民

同前

何府縣何國郡町村何番地

住居

書名

同前

名氏 藏版

同前 (版主數名ナレハ各名ヲ記スヘシ)

右之通致藏版候ニ付此段御届申上候也

年月日

何 某 印

明治九年十一月十五日
終明 省甲 第四十二號 布達 日內

彫畫類是迄三部ツ、納本致來候處自今尋常彫畫錦畫

フ云ニ限リ刻成之都度一部可相納此旨布達候事

明治十四年一月二十九日
日明 內治 務省 甲第一號 達

出版版權許可ノ圖書刻成前定價ヲ豫定シ免許料上納候向モ有之候處自今刻成ノ上上納可致此旨布達候事

但明治九年當省甲第四十一號布達取消候事

明治八年十月廿九日
終明 省甲 第二十一號 布達 日內

出版願届書之氏名從前族籍ノミ肩書致シ候處自今官

位アルモノハ族籍并官位ヲモ記入シ可差出此旨布達

候事

明治九年一月十二日
內務 省甲 第二號 告 達

圖書刻成納本ノ節添書式區々ニテ一定セサルヨリ往

々不都合之儀少ナカラス候條別紙雛形ノ書式ニ照準

可差出此旨布達候事

但定價ハ每部卷末ニ捺印シ編ヲ遂ヒ漸次出版スル

モノハ每(編)冊其定價ヲ捺印可致事

別紙

納本添書式雛形用紙美濃紙

書名 何誰譯全部何冊(何冊之内)

全部定價何圓(漸次出版ノ何編)何圓

右ハ何年何月何日出版御局任何年月日板滯御免許

相成文部省ノ許可ヲ受ケシモノハ何年文部省ノ許可ヲ蒙リ

候處今船刻成ニ付三部納本仕候也

年月日

何府

何族籍

何誰

所印

內務卿某殿

原書冊別ニ送付ノ向ハ

追テ原書ハ通運會社(郵便)ニ差出候也

第四類 銃砲

明治五年一月廿九日
太政官第廿八號布告

銃砲取締規則別紙之通被定候條來ル四月ヨリ規則之

通可相守事

別紙

銃砲取締規則

第一則

一大小銃砲共彈藥類商賣ノ儀ハ府縣共定員ノ外取扱致
間敷右定員ノ商賣ハ其地方管廳ニ於テ精選ノ上免許
狀可差出事

但東京大坂ノ儀ハ武庫司ニテ管轄スヘキ事

免許商賣ノ定員

一 府下 各五員

一 縣下 各三員

一 鎮臺本分營下 各一員

但府縣府下開港場等ニアルハ別ニ設ケズ

一 開港場 各五員

右免許間差遣候商買ノ姓名住所等京員武庫司届ク
ヘキ事

第二則

一 免許証人タリトモ軍用之銃砲彈藥類ヲ盜ニ賣買不相
成賣渡候節ハ買主ヨリ官ノ免許手形ヲ受取リ其員數
ヲ照シ賣渡可申又買入之節ハ其管廳へ願出免許手形
ヲ受其員數ヲ以テ買取可申事

但東京大坂ノ儀ハ武庫司へ可願出出事

第三則

一 免許ノ商人其賣買ノ銃砲彈藥類ハ多少ヲ論ゼス買取
賣渡共其主人ノ姓名其物品ノ員數等明細附記シ軍用
ノ者ハ免許手形相添毎月其管廳へ可差出其廳ヨリ毎月
十日ヲ限リ管轄鎮臺へ差送可申事
但諸鎮臺ヨリ毎歲正月七日兩度半ケ年明細帳ヲ以
テ東京武庫司へ差送リ可申尤東京大坂ノ儀ハ武庫司
ニ於テ取締可致事

第四則

一 彈藥ノ儀ハ假令些少ノ品タリトモ唯便利ノミナ計リ
勝手ノ場所へ差置間敷兼テ其地方管廳へ願出差圖ヲ
受ケ相圍可申事

但東京大坂ノ儀ハ武庫司へ願出ヘキ事

第五則

一 華族ヨリ平民ニ至ルマテ免許銃類ヲ除クノ外軍用ノ銃砲并彈藥類ヒストールニ至ル迄私ニ貯蓄不相成就テハ是レ迄銘々所持致居候軍用銃砲ハ一々其管廳ニ持出東京大阪別紙銃砲致刻印式ノ通番號官印ヲ受可申他人へ譲リ與へ候節ハ第二則ノ手續ニ從フヘシ但彈藥買入致シ度者モ亦二則ノ通リタルベシ

銃砲改刻印ノ式

干支何番 武庫司或ハ府縣

右所持ノ人名番號等逐一書記シ置管轄鎮臺へ届出鎮臺ヨリ東京武庫司へ差送可申事

免許ノ銃類

一 和銃四文目八分玉已下

一 各國諸獵銃

但西洋獵銃ノ義ハ其玉目稍大ナレハ霰彈ヲ用エ
ルモノハ之ヲ許ス

右獵用銃所持ノ者ハ其銃名其數等巨細附記シ其

管廳へ届出其廳ヨリ東京武庫司へ差出可申東京大阪

ハ所持ノ者ヨリ直ニ萬一軍用獵用銃ノ差別雜相

辨者官へ尋出候得ハ檢査ノ上免許ノ証印ヲ据へ

可相渡事

第六則

一 免許獵人ノ外獵リニ銃獵致シ間敷銃獵致度モノハ其官廳へ願出テ候得ハ吟味ノ上別紙ノ通其廳ヨリ免許獵札可差出遣事

但免許獵人ノ姓名ハ其官廳ヨリ東京武庫司へ可届出事

免許獵札ノ式

四類ノ六

六十六

四類

何縣 何郡 何村 何身分

何 某

第何號

右銃砲獵差出候事

年號于支

何府印

第七則

一銃砲彈藥下々ニ於イテ製造不相成候尤モ新ニ奇巧便利ヲ發明シ爲試製作致度者ハ其管廳ニ相願管轄鎮臺ニ届出免許可受事

但製作其宜シキニ適ヒ最モ便利ナル者ハ鎮臺ヨリ武庫司ニ差送り検査ヲ遂ケ採用可相成分ハ西洋免許ノ法ニ倣ヒ何分ノ御沙汰可有之事

是迄砲銃並彈藥類賣買致來候者ハ現今所持ノ物品員數等無遺滿書記シ管轄廳ニ爲指出其廳ヨリ東京武庫司ニ可差出事

但東京大坂ノ儀ハ賣買ノ者ヨリ直ニ武庫司ニ可届出事

右之通候事

明治五年九月二十三日 太政官

明治五年八月二十九日 開港開市場有之使府縣

銃砲並彈藥類外國人ヨリ買入ノ儀ニ明治五年(六月)第百八十五號布告ノ趣モ候處自今銃砲並彈藥類外國人ト賣買ノ儀免許商人ヨリ願出節ハ其管廳ヨリ陸軍省ニ申請ノ上可取計此旨相達候事

明治五年九月二十二日 達

四類ノ七

六十七

四類

諸省府縣

銃砲取締ノ儀ニ付別紙ノ通被定候條此旨相達候事
別紙

銃砲取締規則ニ遣ヒ銃砲彈藥類ヲ竊ニ所持シ且致取
扱候者有之節ハ各地方ニ於テ其品取上ケ更ニ五拾錢
ノ科料可申付候事

但取締向ニ關係無之者見當リ訴出候ニ付テハ犯人
過料ノ半金ヲ可被下事

右取上候品東京大坂ハ武庫司其他ハ所轄ノ鎮臺ニ可
差出事

明治七年十二月八日
百三十二號布告

明治五年壬申(九月)第二百八十二號布告銃砲取締規則
違犯ノ者罰則左ノ通増補候此旨布告候事

一 免許ヲ得スシテ銃砲彈藥ヲ製造スル者ハ其品取上ケ
更ニ三圓已内ノ過料可申付事

但書同前

明治八年六月二十八日
百一十一號達

今般銃砲彈藥取締ノ義内務省ニ管理被仰付候ニ付テ
ハ追テ相達候儀モ可有之候得共差向キ従前規則ノ通
相心得取締可致尤モ右規則中是迄陸軍省及ヒ各鎮臺
等ニ申出候分ハ綜テ内務省ニ可申出其他管理替ニ付
抵觸ノ箇條ハ廢シ候儀ト可心得此旨相達候事

明治八年十二月十日
百八十九號布告

明治五年(正月)第二十八號ヲ以テ銃砲取締規則布告候
處其際所持人ノ内洋行或ハ他縣下ニ寄留等ニテ届方
等開ニ致シ今日ニ至マテ其儘所持候者モ有之哉ノ趣

相聞不都合ノ事ニ候得共特別ノ詮議ヲ以テ一時改印
 イタシ遣スヘシ候間届漏ノ次第許細書認メ明治九年
 二月廿八日マテニ其管轄廳へ可願出右期限ヲ過キ申
 出ル者又ハ貯藏スル者ハ明治五年(九月)第二百八十二
 號布告ノ通可及處分候條此旨布告候事

明治八年十二月四日
 第二百十二號布達

使府縣

人民所持ノ銃砲是迄届漏ノ分願出方今般第百八十九
 號ノ通及布告候條各廳ニ於テ成規ノ通改濟ノ上銃名
 人名等取纏メ内務省へ可申出此旨相達候事

銃砲所持ノ者届漏ノ分ハ明治九年四月三十日迄ニ其
 管轄廳へ改印可願出旨本年(三月)第三十九號ヲ以テ布

告候處更ニ本年八月三十一日迄延期候條此旨布告候

事

明治八年内務省
 第四百四十四號

明治五年第廿八號公布銃砲取締規則第三條ニ準シ每
 月十日限賣買表差出來候處自今別紙甲表ノ通前后半
 分ヲ區別シ毎年一月七日兩度ニ相届其他乙表雖形ノ
 通銃砲讓受員數等取調毎年二月中差出候様可致此旨
 相達候事

但人民ヨリ各廳へ差出サセ候義ハ従前ノ通ト相
 心得事

別紙

書式心得

(甲) 賣買表ハ前后半年ニ區別シ免許商一名一表ニ製

スヘキ事

一品種ノ内洋銃ハ其名ヲ記シ和銃ハ玉目ヲ附シ
 火藥ハ總テ何貫何百目ト記スヘキ事

(乙)

讓受表ハ管下一般ノ人民一ケ年間ノ讓受ニ係ル
 モノヲ掲出シ併セテ縣下ノ合數ヲ掲シヘキ事

一 讓受人買受人トモ本縣人民ナレハ雛形表面ノ通
 タルヘシト雖モ若シ本縣人民ヨリ他縣人民ヘ讓
 リ又ハ他縣人民ヨリ本縣人民ノ買受クル事ハ國
 郡名ノ上ニ其管轄府縣ノ文字ヲ加フヘキ事

一 讓受ニ係ル銃砲用立カタキモノ鑄潰シ等ニ屬ス
 ルモノハ銃名員數人名ヒ朱ヲ以テ記シ區別スキ
 事

一 管下人民在來所持ノ銃砲讓受ニ係ラサルモノ其

數ヲ掲ケルヲ表面ノ通タルヘキ事

一 其年十二月申調査ニ右鑄潰シ等ノ分ヲ除キ縣下
 存在ノ數ヲ悉皆合計掲出スルヲ表面ノ通タルヘ
 キ事

甲

銃砲彈藥賣買表					何國何郡何町村	
					免許商	何某
明治何年	買		入		賣	
後前 半年分	品	種	員	數	品	種
七 一	何	品	何	程	何	品
八 二	何	品	何	程	何	品
九 三	何	品	何	程	何	品
十 四	何	品	何	程	何	品
十 五	何	品	何	程	何	品
一	何	品	何	程	何	品

十六
二

月

計		總		何品	何程	何品	何程
\	\	\	\	\	\	\	\

乙

銃砲讓受表

何縣府

受

明治	何年	銃名	員數	國郡	村	族籍	銃名	員數	國郡	村	族籍	月	日	何	各自在來		所有銃數		縣下存		在合計		
															軍	獵	軍	獵	軍	獵			
																和洋	和洋	和洋	和洋	和洋	和洋		
																何	何	何	何	何	何		

明治十年二月二十五號
內務省

府縣
東京府

人民所有軍用銃砲ノ內獵銃ニ改造又ハ鑄潰シ成ハ燒

爛等ニテ廢銃聞届候節ハ該品調査ノ上檢印削除方取計
毎年六ヶ月分取纏人名銃名共詳細可届出此旨相達候事
明治十年十二月廿六日
內務省第百十號達

府縣東京府

明治八年當省乙第百四十四號達甲乙二表及本年乙第
二十五號達中人名等届出方ノ義ハ追テ何分ノ義相達
スル迄不及差出候條其應限リ調理致シ置可中此旨相
達候事

但從前差出有之候銃砲所持人名原簿ノ義モ増補等
ノ都度其人名等届出候分ハ本文之通可取計事
明治五年八月十日
陸軍省達

諸縣

各縣下中銃砲賣買免許商人可賣捌火藥買込ノ義ニ付

差支ノ向モ有之候ハ諸鎮臺本分營ニ於テ不用ノ品賣
拂爲致候間買得願高取調各縣應添書ヲ以其營ノ本營或
ハ分營へ可願出此旨相達候事

諸縣

明治五年九月十日
陸軍省達

火藥拂下之義ニ付別紙之通相達置候處東京大坂兩所ノ
義ハ武庫司へ可願出候此旨更ニ相達候事別紙ハ同年八
月十五日同省ヨリ諸縣へ達ヲ云フ

府縣

明治七年二月三日
第五十一號達
陸軍省

銃砲取締規則ニ違ヒ候者取上品處分ノ義去ル壬申御布
告ノ通所轄鎮臺へ可差出筈ニ候所鎮臺遠隔ノ向ハ便宜
ヲ以テ其最寄營所へ爲差出營所へモ相隔リ候節ハ銃砲

四類ノ十六

賣買免許商人へ賣却ノ上代價相納不苦候條此旨爲心得
相達候事

内務省十四年乙第廿六九月四日

警視廳
府縣東京府

暴發物トイノナ類ハ當分銃砲取締規則及火藥運搬規則ニ

準シ取扱ヘシ此旨相達候事各火藥運搬規則ハ第三
倫藥品害ノ部ヘ掲ケ

明治十四年丁第四三月十九日
司法省丁第四三月十九日

各裁判所

銃砲取締規則違犯者ヨリ沒収ノ銃器彈藥ノ内些少或ハ
廢品等ニテ適宜處分方陸軍省協議ノ末現品賣却代價同
省へ回附ノ處右ハ本月八日附ヲ以テ陸軍卿ヨリ廻附ニ
不及旨通達有之候條以來雜収入誰贖金ノ内へ編入本省
へ納附可取計此旨相達候事

明治十七年十一月廿七日
第十三十一號布告

火藥取締規則別冊ノ通制定ス

但從前ノ成規中此規則ニ矛盾スルモノハ總テ廢止ス

右奉勅旨布告候事

(別冊)

火藥取締規則

第一章 總則

第一條 凡火藥劇發火藥棉火藥、ナイト、ロカ、リセ、質、ン、物、ダ、イハ人民ニ於テ製造スルヲ禁ス但烟火マツチノ類ハ此限ニアラス

第二條 火藥類火藥、劇發火ノ賣買營業ヲ爲サントスル者ハ管轄廳東京府、警視廳ハニ願出免許鑑札ヲ受ク可シ但營業者ハ一管内ニ十五人以内トス

第三條 火藥類ハ營業者ニ限り海軍陸軍兩省ヨリ其貯藏品ヲ拂下ク可キモノトス

第四條 管轄廳東京府、警視廳ハニ於テ火藥類ノ検査ヲ必要ト認ムル時ハ營業者タルト否トヲ問ハス警察官ヲシテ之ヲ検査セシムルコトアルヘシ

第五條 戰時若クハ事變ニ際シテハ陸軍卿海軍卿ハ火藥類ノ拂下ヲ停止シ内務卿ハ其賣買運搬ヲ停止スルコトアル可シ

第六條 火藥類ハ官許ヲ得ルニ非サレハ日出前日没後ニ於テ賣買運搬其他荷造等ヲ爲ス可カラス

第二章 賣買

第七條 營業者ハ毎月買受ケタル火藥類ノ種類數量ヲ記シ証書添ヘレハ翌月十日迄ニ所轄警察署ニ届出可シ

第八條 營業者ニ非スシテ所有ノ火藥類ヲ賣ラントスル者ハ營業者ニ之ヲ賣渡ス可シ營業者ハ其賣渡証書ヲ取り置ク可シ

第九條 營業者ハ銃砲用又ハ坑業土工烟火其他職業用ニ限り火藥類ヲ賣渡ス可キモノトス但十六歳未滿若クハ

白痴風癩ノ者ニハ之ヲ賣渡ス可シ許サス

第十條 火藥類ヲ買受ントスル時銃獵若クハ烟火製造ノ
免許ヲ得タル者ハ其免狀ヲ營業者ニ示シ銃砲用ノ爲メ
ニスル者ハ所轄警察署ノ許可証ヲ受ケ之ヲ營業者ニ渡
シ陸海軍々人ノ射的用ニ供スル者ハ其省ノ許可証ヲ受
ケ之ヲ營業者ニ渡ス可シ但一回ニ左ノ數量ヲ超ルコト
許サス

小銃用 火藥 三百目 雷管 五百個

船舶設備銃砲用 大砲一門ニ付 火藥 五十發分 雷管類 七十個
小銃一銃ニ付 火藥 百發分 雷管類 百五十發

烟火製造用 火藥 五貫目

坑業土工其他職業用ニ供スル火藥類ヲ買受ントスル者
ハ其旨趣及種類數量並ニ使用ノ場所ヲ記シ所轄警察署
ノ許可証ヲ受ケ之ヲ營業者ニ渡ス可シ

第十一條 營業者ハ買受人ノ免狀ヲ檢シ若クハ許可証ヲ
受取リ火藥類ヲ賣渡ス可シ但第十條ノ數量ヲ超ルコト
許サス

第十二條 營業者ハ毎月火藥類買受人ノ住所氏名及其賣
渡シタル種類數量年月日ヲ記シ之ヲ添アヘハ翌月十日迄
ニ所轄警察署ニ届出可シ

第三章 貯藏

第十三條 火藥類ハ火藥三百目雷管導火管類五百個迄ハ
安全ナル場所ニ之ヲ貯藏スルコトヲ得

營業者ハ前項制限ノ外火藥拾貫目劇發火藥壹貫目雷管
導火管類壹万个迄烟火製造人ハ火藥五貫目劇發火藥五
百目迄ハ管轄廳東京府 警視廳ハノ許可ヲ受ケ倉庫ニ之ヲ貯藏
スルコトヲ得其數量ヲ過ルルハ火藥庫ノ外之ヲ貯藏スル

ヲ許サス火藥五百貫目以上劇發火藥五十貫目以上ハ
火藥庫ト雖モ之ヲ貯藏スルヲ許サス

第十四條 火藥類ヲ一庫内ニ貯藏スルモ其種類毎ニ不
燃質物ヲ以テ區畫スヘシ

第十五條 火藥庫ヲ建設セントスル者ハ其位置并ニ建設
ノ方法書及近傍ノ地圖ヲ添へ管轄廳東京府ハニ願出許
警視廳ニ願出許
可ヲ受クヘシ

第十六條 火藥庫ハ皇居離宮ノ區域ヲ距ル十町以内ノ地
ニ建設スルヲ許サス

第十七條 火藥庫ハ皇陵社寺公園家屋火ヲ取扱フ場所宅
地國道縣道鉄道電信柱汽船ノ通スヘキ河湖及他ノ火藥
庫境界トノ中間ニ五十間以上ノ距離ヲ有ツ可シ

第十八條 火藥庫ハ土藏又ハ煉瓦造ニシテ家根ハ輕量ノ
不燃質ヲ用ヒ内部ニハ鐵釘石瓦ヲ露ハサス窓ニハ透明
ノ硝子ヲ用フ可ラス又避雷針ヲ設ケ庫外ノ周圍ニ二間

以上ヲ隔テ、高サ六尺以上ノ土堤ヲ築キ其入口ニ火藥
庫ト書シタル標木五曲尺六尺以上ノモノニテ建ツ可シ

第十九條 火藥庫ヨリ十四間以内ノ地へ材木草秣其他燃
質物ヲ蓄積スヘカラス又五十間以内ニ於テ火ヲ取扱フ
建造物ヲ設ケ若クハ瓦斯ノ傳送管ヲ施シ若クハ發火質
ノ物品ヲ蓄積ス可カラス

第二十條 坑業土工其他多量ノ火藥類ヲ要スル爲メ其事
業中假貯藏所ヲ設ケントスル者ハ第十七條ニ掲ケタル
距離ヲ二倍シ第十五條ニ據リ管轄廳東京府ハニ願出許
警視廳ニ願出許
可ヲ受クヘシ但貯藏ノ數量ハ火藥貳百貫目劇發火藥三
拾貫目ヲ超ルヲ許サス

第二十一條 烟火製造所ハ家屋若クハ火ヲ取扱フ場所ヨ
リ十間以上ノ距離ヲ有ツヘシ又五貫目以上ノ火薬類ヲ
置ク可ラス

第四章 運搬

第二十二條 五貫目以上ノ火薬類ヲ運搬セントスル時ハ
其種類數量運搬ノ日時場所及水陸通路ノ名稱ヲ記シ所
轄警察署ノ許可証ヲ受ケ之ヲ携帶シ運搬終ラハ直ニ之
ヲ返納ス可シ若シ其警察署管轄外ノ地ニ運搬スル時ハ
其地ノ警察署ニ之ヲ納ム可シ

第二十三條 五貫目以上ノ火薬類ヲ運搬スル時ハ鉄釘鉄
輪ヲ用ヒカル木製銅製若クハ亞鉛製ノ器ニ入レ其外部
ハ筵包若クハ繩巻ト爲シ毛布類ヲ以テ之ヲ覆ヒ赤地ニ
火薬ノ二字ヲ白字シタル小旗陸路ニハ曲尺縦ニ二尺横ニ三尺五
寸水路ノ小船ニハ曲尺縦ニ二尺横ニ三尺五

五尺寸横ヲ建テ護送人ヲ附ス可シ但船積スル時ハ明治六
年八月第貳百九十貳号布告危害品船積法ニ從フ可シ

第二十四條 火薬類ヲ運搬スルニハ火氣ニ注意シ休泊ノ
時ハ安全ナル場所ヲ撰ヒ看守人ヲ附ス可シ

第五章 罰則

第二十五條 私ニ火薬類ヲ製造シ若クハ販賣シタル者ハ
軍用品ニアラスト雖モ刑法第百五十七條ヲ適用シ私ニ
之ヲ所有シタル者ハ刑法第百六十條ヲ適用ス

第二十六條 刑法第百五十八條第百五十九條第百六十一
條ハ前條ノ犯罪ニ關シタル者ニモ亦之ヲ適用ス

第二十七條 私ニ火薬庫又ハ假貯藏所ヲ建設シタル者ハ
十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十八條 第四條ノ検査ヲ拒ミ又ハ第五條ノ停止ヲ犯

シテ賣買運搬シ第九條第十條第十一條第十三條第十九條ニ違犯シ又ハ第二十條ノ制限ヲ超テ貯藏シ又ハ第二十一條ニ違犯シタル者又ハ營業者賣買ヲ除クノ外火藥類ヲ讓受若クハ讓渡シタル者ハ二圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十九條 第六條第七條第八條第十二條第十四條第十八條第二十二條第二十三條第二十四條ニ違犯シタル者ハ一圓以上一圓九十五錢以下ノ科料ニ處ス

第三十條 營業者此規則ニ違犯シタルキハ其情狀ニ因リ行政ノ處分ヲ以テ營業ヲ禁止シ又ハ停止スルヲ得

附則

一 従前免許ヲ得タル火藥製造人ハ來ル明治十八年二月廿八日迄其營業ヲ差許シ又同日迄ニ火藥製造諸器械及火

藥類ノ現貯藏數量ヲ記シ管轄廳東京府ハニ願出ルニ於テハ相當ノ代價ヲ以テ之ヲ買上ク可シ

一 従前免許ヲ得タル彈藥免許商人ハ來ル明治十八年二月廿八日迄火藥賣買營業ヲ差許シ従前免許ヲ得タル烟火製造所ハ右同日迄其製造ヲ差許ス又従前火藥類ヲ貯藏シタル者ハ來ル明治十八年一月三十一日迄其貯藏ヲ差許ス其日限ヲ過クルキハ總テ此規則ニ従フヘシ

明治十七年十二月廿七日
第三十式號布告

爆發物取締罰則別冊ノ通制定ス

(別冊)

爆發物取締罰則

第一條 治安ヲ妨ケ又ハ人ノ身體財産ヲ害セントスルノ

目的ヲ以テ爆發物ヲ使用シタル者及ヒ人ヲシテ之ヲ使用セシメタル者ハ死刑ニ處ス

第二條 前條ノ目的ヲ以テ爆發物ヲ使用セントスルノ際發覺シタル者ハ無期徒刑又ハ有期徒刑ニ處ス

第三條 第一條ノ目的ヲ以テ爆發物若クハ其使用ニ供ス可キ器具ヲ製造輸入所持シ又ハ注文ヲ爲シタル者ハ重懲役ニ處ス

第四條 第一條ノ罪ヲ犯サントシテ脅迫激唆煽動ニ止マル者ハ重懲役ニ處ス

第五條 第一條ニ記載シタル犯罪者ノ爲メ情ヲ知テ爆發物若クハ其使用ニ供ス可キ器具ヲ製造輸入販賣讓與寄藏シ及ヒ其約束ヲ爲シタルモノハ重懲役ニ處ス

第六條 爆發物ヲ製造輸入所持シ又ハ注文ヲ爲シタル者

第一條ニ記載シタル犯罪ノ目的ニアラサルヲ証明スルヲ能ハサル時ハ二年以上五年以下ノ重禁錮ニ處シ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第七條 爆發物ヲ發見シタル者ハ直ニ警察官吏ニ告知ス可シ違フ者ハ五圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス

第八條 本則ニ記載シタル重罪犯アルヲ認知シタル時ハ直ニ警察官吏若クハ危害ヲ被ムラントスル人ニ告知ス可シ違フモノハ六月以上五年以下ノ重禁錮ニ處ス

第九條 本則ニ記載シタル重罪ノ犯人ヲ藏匿シ若クハ隠避セシメ又ハ其罪証ヲ湮滅シタル者ハ正犯ノ刑ニ一等又ハ二等ヲ減ス

第十條 本則ニ記載シタル重罪ヲ犯シタル者ニハ刑法第八十條及ヒ第八十一條ノ例ヲ用ヒス但十六歳未滿ニシ

テ是非ノ辨別ナキ者ハ刑法ニ從フ

第十一條 第一條ニ記載シタル犯罪ノ豫備陰謀ヲ爲シタル者ト雖モ未タ其事ヲ行ハサル前ニ於テ官ニ自首シ因テ危害ヲ爲スニ至ラサル時ハ本刑ヲ免シ六月以上三年以下ノ監視ニ付ス第五條ニ記載シタル犯罪者モ亦同シ

第十二條 本則ニ記載シタル犯罪刑法ニ照シ仍ホ重キ者ハ重キニ從テ處斷ス

明治十七年十二月廿二日
第三十號布告

西洋形船舶検査規則別冊ノ通制定シ明治十八年七月一日ヨリ施行ス

(別冊)

西洋形船舶検査規則

第一條 西洋形船舶海軍艦船ヲ除クハ此規則ニ遵ヒ検査ヲ受ク

可シ但登簿船免狀ヲ受有スルコ及ハサル風帆船ハ此限ニアラス

第二條 船舶検査所設置ノ場所ハ農商務卿之ヲ定ム

第三條 検査所所在ノ地方ヲ航行スル船舶ノ検査ハ其最寄検査所ニ願出ヘシ

第四條 検査所未設ノ地方ヲ航行スル船舶ノ検査ハ其船籍アル地方廳ヲ經テ農商務省ニ願出ヘシ

第五條 登簿船免狀ヲ受有スルコ及ハサル汽船ノ検査ハ其船籍アル地方廳ニ願出ヘシ

第六條 検査官吏ハ農商務卿之ヲ命ス但第五條ノ汽船ニ係ル検査官吏ハ府知事縣令之ヲ命ス

第七條 検査官吏ニ於テ船舶ヲ検査シ航行ニ適當ト認ム

ルキハ農商務省ヨリ左ノ事項ヲ記載シタル検査證書ヲ
交付ス但地方廳ノ検査ニ係ル者ハ其廳ヨリ之ヲ交付ス

一番号

一船名

一船主氏名

一定繫場名

一登簿噸數

一端船其他必要ノ所屬品

一航行シ得ヘキ場所ノ定限

一證書有効期限

汽船ニハ左ノ事項ヲ加フ

一公稱馬力

一汽機ノ種類

一最大汽壓

一旅客定員

第八條 検査官吏ニ於テ船舶ヲ検査シ航行ニ不適當ト認
ムルキハ其修理ヲ命シ或ハ出航ヲ差止ムヘシ

第九條 検査證書ノ効力ハ其船ノ現狀ニ依リ六ヶ月十二
ヶ月ニ區別ス

第十條 検査證書ハ船内最モ見易キ場所ヘ掲ケ置クヘシ

第十一條 検査證書ヲ亡失若クハ毀損シタルトキハ其理
由ヲ詳記シ再渡ヲ願出ヘシ

第十二條 船名船主及ヒ定繫場ヲ變更シタルキハ農商務
省又ハ地方廳ニ届出ヘシ

第十三條 船体若クハ汽機汽罐其他要部ノ修理若クハ變

更チナシタルキハ更ニ検査ヲ受クヘシ

第十四條 船舶航行ノ用ヲ爲サ、ルニ至リタルキ又ハ除籍トナリタルキハ直ニ検査證書ヲ農商務省又ハ地方廳ニ返納スヘシ

第十五條 検査證書ノ有効期限内ト雖モ検査官吏ニ於テ必要ト認ムル場合ニ於テハ臨檢スルヲアルヘシ

第十六條 船舶ノ検査ヲ受ケスシテ航行シ又ハ無効ノ検査證書ヲ使用シ又ハ検査證書ニ記載セル最大汽壓ヲ超過シ或ハ場所ノ定限ヲ越エテ航行シ又ハ検査官吏ノ命ニ違背シ修理セズノ出航シ若クハ差止ノ命ニ違背シテ出航シタルモノハ三十拾圓以上三百圓以下ノ罰金ニ處ス

第十七條 検査證書ニ記載セル端船其他必要ノ所属品ヲ具ヘス又ハ旅客定員ヲ超過シテ航行シ又ハ第十三條ヲ

犯シタル者ハ拾圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

第十八條 検査官吏ノ臨檢ヲ拒ミ又ハ第十條ヲ犯シタル者ハ貳圓以上貳拾圓以下ノ罰金ニ處ス

第十九條 前三條ノ場合ニ於テ正當ノ事由アルモノハ其罪ヲ論セズ

第二十條 第十一條第十二條第十四條ヲ犯シタル者ハ二圓以上一圓九十五錢以下ノ科料ニ處ス

第二十一條 検査細則及ヒ施行ノ手續ハ農商務卿之ヲ定ム

第五類 土地欺隱

明治十九年五月十二日
第六十七號布告

隱田切開切添地等ノ儀ニ付テハ明治五年九月大藏省第百
二拾六号布達地券渡方規則第廿一條及明治六年九月第三
百拾五号ヲ以及布告候趣モ有之候處更ニ左之通相定候
條此旨布告候事

第一條 隱田切開添地ノ此布告以前ニ係ルモノ該府縣地
租改正濟迄ニ申出ル時ハ其罪ヲ問ハス其者所有ニ可相
定若シ之ヲ申出スシテ改正濟後ニ至リ發覺スルモノハ
律ニ照シ處分スヘシ

但此布告以後ニ係ルモノハ地租改正濟ノ前後ヲ不論
渾テ律ニ照シ處分スヘシ

第二條 廉落殘歩ハ此布告ノ前後ヲ論セス該府縣地租改

正濟迄ニ申出ル時ハ其罪ヲ問ハス其者所有ニ可相定若シ之ヲ申出スシテ改正濟後ニ至リ發覺スルモノハ律ニ照シ處分スヘシ

第三條 官簿ニ記載アル地并記載ナシト雖旧從來官山官林用地附屬地等ノ證アル地ヲ私ニ田畑宅地等ニ侵墾セシモノ此布告以前ニ係ルモノハ該府縣地租改正濟迄ニ申出ル時ハ其罪ヲ問ハス其民有地トナシ差支ナキモノハ其者へ素地相當代價ヲ以可拂下其民有トナシ難キモノハ直チニ返地セシメ事情ニヨリテハ更ニ借地差許ス儀モユレアルヘシ

第四條 前條侵墾地地租改正濟後ニ至リ發覺スルモノ及此布告以後ニ係ル侵墾地ハ渾テ律ニ照シ處分スヘシ

第五條 前條ノ地ハ舊藩縣ヨリ開懇願濟ノ分タリ共未タ

地代金ヲモ納メスシテ朱着手ノモノハ直ニ返地セシメ其民有地トシテ差支ナキモノハ更ニ相當代價ヲ以其者へ可拂下其地代金ヲ納メスモ已ニ着手スルモノハ直ニ其者ノ所有ト定ムヘシ

第六條 凡ソ民有ニアラサル地ヲ私ニ賣買或ハ質入トナス者此布告以前ニ係ル分地租改正濟迄ニ申出ルモノハ其罪ヲ問ハス其民有地トナシ差支ナキモノハ賣買并流質地共買得者及質取主へ其儘無代ニテ下渡其民有地トナシテ差支アルモノ并質地年限中ノモノハ官有地ニ編入スヘシ此布告以後ニ係ルモノハ地租改正濟ノ前後ヲ不論律ニ照シ處分スヘシ

明治十五年七月廿四日

脱税ノ爲メニ土地ヲ欺隱スル者ハ四圓以上四拾圓以下

第五類ノ四

ノ罰金ニ處シ現地目ニ依リ地價ヲ定メ欺隱年間ノ租稅
ヲ追徵ス但地租改正ノ初年以前ニ遡ルコトヲ得ス其罪
ヲ犯シ自首スル者ニ罰金ヲ免ス其追徵スヘキ租稅ハ仍
ホ之ヲ納メシム
右奉 勅旨布告候事

第六類 鐵道

明治六年三月十三日
第百一號布告

壬申第百四十一号布告鐵道犯罪罰例別紙ノ通改正相
成候條此旨布告候事

鐵道犯罪罰例

- 第一條 鐵道掛ノ者總テ鐵道上ニ關カル事務取扱中醉
ニ乘シ無狀ヲ現ハスニ於テハ二十五圓以内ノ罰金ニ
處ス若シ其職掌怠惰輕忽ニヨリ鐵道旅客ノ危難トモ
ナルヘキ取扱アルキハ其事情ニ依リ五百圓以内ノ罰
金又ハ三月以内ノ懲役或ハ禁錮ニ處ス
- 第二條 規則第四條ニ記スル所ノ不法ヲ爲ス者ハ二十
五圓ノ罰金或ハ三十日ノ禁錮ニ處ス
- 第三條 規則第五條ノ禁ヲ犯ス者ハ十圓以内ノ罰金ニ

處ス

第四條 規則第六條ノ禁ヲ犯ス者ハ拂タル賃金ヲ沒シ二十五圓以内ノ罰金ニ處ス

第五條 規則第七條ノ禁ヲ犯ス者ハ拂タル賃金ヲ沒シ十圓以内ノ罰金ニ處ス

第六條 規則第八條ニ記セル所持ヲ爲ス時ハ拂タル賃金ヲ沒シ二十五圓以内ノ罰金或ハ三十日以内ノ禁錮ニ處ス

第七條 規則第九條ニ記スル所ノ不法ヲ爲ス者ハ五十圓以内ノ罰金又ハ六週間以内ノ懲役或ハ禁錮ニ處ス

第八條 規則第十條ノ禁ヲ犯ス者ハ二十五圓以内ノ罰金ニ處ス

第九條 規則第十一條ノ禁ヲ犯ス者ハ二十五圓以内ノ

罰金或ハ三十日ノ禁錮ニ處ス

第十條 規則第十五條ノ禁ヲ犯ス者ハ二十五圓以内ノ罰金ニ處ス

第十一條 規則第十七條ニ記スル所ノ諸荷物品書其外ヲ故ラニ出サス或ハ故ラニ欺偽ノ品物ヲ出ス者ハ三ヶ月以内ノ懲役又ハ禁錮或ハ其品物一噸千七百以下ハ十圓丈一噸千七百以上ハ二十五圓ノ罰金ニ處ス一噸以下ハ十圓丈一噸ノ贖金高五百圓ニ過ギズ

第十二條 鐵道附屬品ヲ毀損スル者ハ第七條ニ照シ罰ヲ料スル外其毀損物ノ代價ヲ償ハシムルヲアルヘシ但シ其償金ノ追徴モ鐵道察ヨリ法官ヘ乞フキハ法官ニ於テ追徴スヘシ

第七類 電信

明治十七年九月廿二日
第九十八號布告

電信條例別冊之通相定本年十二月一日ヨリ施行候條
此旨布告候事

別冊

日本帝國電信條例

第一條 此條例ハ日本帝國政府電信寮ニ於テ所轄スル
處ノ電機上ニ施行スルナリ

第二條 此條例中ニ用ユル電報ノ語ハ百般ノ音信總テ
電機ヲ以テ傳送シ又ハ傳送セント欲スルモノヲ指テ
言フナリ

第三條 日本政府電信寮ハ日本帝國外ノ各地へ又ハ各
地ヨリ傳送スル電報ヲ除キ日本帝國中ニ電報ヲ傳送

シ及ヒ受取り取集メ届渡等一切關係ノ事務ヲ取扱フ
専任ノ權ヲ有ス

第四條 何人ニテモ不法故意ヲ以テ電槽器械柱木信線
若シクハ其線ヲ覆フ匣蓋管筒或ハ支凸腕木枷木陶器
海底線浮標旗竿號報柱及ヒ電機并ニ其附屬一切ノ物
品ヲ毀傷スル者或ハ此ノ電機ニテ通信ノ傳送携致又
届渡シテ如何様ナル仕方ニテモ妨碍スル者其他上件
ノ枷木支凸腕木ヲ拔取ル者ハ五百圓ヨリ多カラサル
罰金又ハ三月ヨリ長カラサル懲役或ハ禁獄ニ處ス
但シ過誤失錯ニ出ル者ハ其損害ノ多少ニ隨テ償金
ノミヲ出サシム

第五條 電機掛リ官員及ヒ改役或ハ其他ノ官員又ハ何
人ニテモ電信寮ノ事務ニ從事スル際之ヲ攻打シ或ハ
粗暴ノ舉動ヲナシ其事業ニ妨碍抗抵ヲ爲ス者ハ五百
圓ヨリ多カラサル罰金又ハ三ヶ月ヨリ長カラサル懲
役或ハ禁獄ニ處ス

第六條 何人ニテモ不法ニ柱木枷木海底線信線旗等浮
標其他電機又ハ其附屬一切ノ物品ニ馬又ハ其他ノ獸
畜或ハ舟筏等ヲ繫ク者ハ其所行ニ依テ損害ノ有無ヲ
論セス壹百五十圓ヨリ多カラサル罰金又ハ四十二日
ヨリ長カラサル懲役或ハ禁獄ニ處ス

第七條 何人ニテモ柱木信線陶器旗竿腕木枷木支凸號
報柱浮標其他ノ物品ニ瓦礫若シクハ雜物ヲ投擲シ又
矢箭火器ヲ彈射スル者ハ其所行ニ依テ毀傷ノ有無ヲ
論セス壹百五十圓ヨリ多カラサル罰金又ハ四十二日
ヨリ長カラサル懲役或ハ禁獄ニ處ス

第八條 何人ニテモ電線ノ近傍ニテ紙鳶ヲ飛シ信線陶器腕木枷木支凸其他電機ニ屬スル物品ニ紙鳶又ハ其附屬ノ糸箒ヲ引掛ケ電氣ノ妨碍ヲ生セシムル者ハ拾圓ヨリ多カラサル罰金又ハ七日ヨリ長カラサル懲役或ハ禁獄ニ處ス

第九條 何人ニテモ不法故意ヲ以テ政府電信寮ヨリ其局々或ハ電線沿道ノ所々ニ取建タル標識揭示等ヲ削剝シ又ハ拔云者ハ五十圓ヨリ多カラサル罰金又ハ四十二日ヨリ長カラサル懲役或ハ禁獄ニ處ス

第十條 何人ニテモ不法ニ電機用ノ一部分タル住木旗竿信線支線支柱ニ攀チ又ハ同様ノ浮標ニ乗ル者ハ其所行ニ依テ妨害ノ有無ヲ論セス二拾五圓ヨリ多カラサル罰金又ハ二十一日ヨリ長カラサル懲役或ハ禁獄ニ處ス

ニ處ス

第十一條 何人ニテモ不法故意ヲ以テ柱木浮標其他一切電機附屬ノ物品ニ落書圖繪又ハ鐫刻スル者ハ拾圓ヨリ多カラサル罰金又ハ七日ヨリ長カラサル懲役或ハ禁獄ニ處ス

第十二條 電機掛官員及ヒ改役或ハ其他ノ官員又ハ何人ニテモ他人ニ届渡スヘキ電報ノ故意ヲ以テ隱匿シ又ハ電信寮ヨリ電報ヲ届渡スヘキ命令ヲ怠リ或ル肯サル者ハ五十圓ヨリ多カラサル罰金又ハ四十二日ヨリ長カラサル懲役或ハ禁獄ニ處ス

第十三條 電信寮ニ仕官スル者故意怠慢ヲ以テ音信ノ傳送又ハ届渡スヲ忘却遅延スル者又ハ同様ノヲ依テ音信ノ傳送届渡ヲ妨碍遷延セシムル者又ハ猥リ

ニ音信ノ旨趣ヲ傳洩スル者又ハ他ノ人民又ハ電信察ノ官員ト雖ヒ其場ニ立入ヘキ職務ニ非サル者ヲ電信察ノ器械室ニ立入ラセ又ハ滯居セシムル者等以上ノ各犯ハ壹百圓ヨリ多カラサル罰金ニ處ス

第十四條 凡此條例中ニ記載シタル箇條ヲ顯然犯サント企ル者ハ五拾圓ヨリ多カラサル罰金又ハ四十日ニリ長カラサル懲役或ハ禁獄ニ處ス

第十五條 凡此條例ヲ犯シテ電信察所轄ノ物品ヲ毀傷シ又ハ他人ノ損失妨害ヲ生ズル者ハ例ニ照シテ處分スルノ外其毀傷損失ノ償金ヲ出サシム

但工部省所轄傳信私線ノ分モ總テ此條例ニ準シ處分ス

第十六條 凡犯人ヲ處斷シ罰金并ニ償金ノ額ヲ定ムル

ハ總テ裁判官ノ權内ニ屬ス

第十七條 凡ソ犯罪ノ形狀ヲ裁判官ヘ報告シ其處分ヲ乞フ手順ハ工部省ニテ取扱フノ權ヲ有ス

明治十八年五月七日
第八號布告

電信條例別冊ノ通改定シ明治十八年七月一日ヨリ施行ス

但明治七年九月第九十八號布告十二年五月工部省第九號布達其他本條例ニ牴觸スル従前ノ布告布達ハ右施行ノ日ヨリ廢止ス

右奉 勅旨布告候事

電信條例

第一章 電報

第一條 凡電報ヲ別テ三種ト爲ス

第七類ノ七

- 一 官報
- 二 局報
- 三 私報

第二條 官報局報私報各別テ七類ト爲ス

一 通常電報

二 至急電報

三 追尾電報

四 同文電報

五 照校電報

六 受信電報

七 返信料前納電報

第三條 電報ヲ傳送スルノ順序ハ官報ヲ先トシ局報之ニ次キ私報又之ニ次クモノトス

第四條 電信局長ニ於テ法律規則ニ違背シ又ハ治安ヲ妨害シ風俗ヲ擾乱スルモノト認ムル私報ハ其傳送ヲ止ムヘシ

第五條 政府ハ時機ニ依リ線路又ハ地方又ハ語辭ヲ限リ私報ヲ停止スルコトアルヘシ

第二章 電報書法

第六條 凡電報ヲ書載スルニハ普通辭又ハ秘辭隱語ヲ問ハズ和文ハ片假名及數字ヲ用ヒ歐文ハ羅馬字及亞刺比亞數字ヲ用フヘシ

第七條 電信局長ニ於テ私報ニ用フル秘辭隱語ノ解譯又ハ其合符原本ヲ要スルキハ之ヲ差出スヘシ

第三章 電報料

第八條 凡電報料ハ國內ヲ通シテ同一ト爲ス但一市内及

壹岐對馬ニ發著スルモノハ此限ニアラス

第九條 電報料及手數料ノ金額ハ別ニ布達ヲ以テ之ヲ定ム

第十條 電報料及手數料ハ電信切手ヲ以テ納ムルモノトス其切手ハ頼信紙ニ貼付スヘシ但返信電報料ノ前納及尋問電報料ノ假納ハ貼付スルノ限ニアラス

第十一條 電信中央局及分局並電信切手賣下所ノ設ケアラサル地ヨリ郵便ニ付シテ電報ヲ發出スル時ハ郵便切手ヲ以テ電信切手ニ代用スルヲ得其郵便切手ハ頼信紙ニ貼付セサルモノトス

第十二條 電報料及手數料ニ用ヒタル電信切手ハ電信中央局及分局ニ於テ消印スヘシ

第十三條 電報料及手數料ハ過納アルモ已ニ電信切手ニ

消印シタル後ハ之ヲ還付セス

未タ傳送セサル電報ヲ返還スルモ已ニ消印シタルモノ亦同シ

第十四條 第四條ニ據リ私報ノ傳送ヲ止ムルモハ其既ニ納メタル料金ヲ還付セス

第十五條 電報取扱ノ過失ニ因テ甚シク遅延シ若クハ到達セサルモノハ其料金ヲ還付ス照校電報ニシテ傳送ノ際誤謬ヲ生シテ其用辨ヲ闕キタルヲ判然タルモノ亦同シ

第十六條 料金還付ノ請求ハ發信ノ日附ヨリ六十日以内ニ電信局長ニ申出ヘシ此期限ヲ過クルモハ一切之ヲ受理セス

第十七條 電報料及手數料ニ不足アルモハ電信中央局及

分局ニ於テ其電報ヲ傳送スルモ其不足ノ料金二倍ヲ發
信人ヨリ追納セシムヘシ

第十八條 發信人又ハ受信人ヨリ納ムヘキ料金ヲ七日以
内ニ徵収シ難キハ發信人ノ納メサルモノハ受信人ノ
納メサルモノハ發信人ヨリ徵収スヘシ

第四章 電信切手

第十九條 電信切手ハ日本政府ニ於テ發行セシモノタル
ヘシ

第二十條 電信切手ハ電報料及手数料納濟ノ證トナスモ
ノトス

第二十一條 電信切手ヲ賣ルモノハ電信局長ノ免許ヲ受
ケ電信切手賣下所ノ標札ヲ掲クヘシ

第二十二條 電信切手ハ電信中央局及分局並電信切手賣

下所ノ外ニ於テ賣買スヘカラス

第二十三條 電信切手ハ其額面ヨリ低價ヲ以テ賣ルヘカ
ラス

第二十四條 返信電報料ノ前納及尋問電報料ノ假納ニ充
ツル電信切手並ニ電信切手ニ代用スル郵便切手ヲ賴信
紙ニ貼付シタルモノハ各其効用ヲ失フ

第二十五條 電信切手ノ汚損毀損又ハ不明瞭ナルモノハ
其効用ヲ失フ但其未タ使用セサルモノニ限リ二人以上
ノ證人ヲ立テ其理由ヲ證明シタルキハ電信中央局及工
部卿ノ告示ヲ以テ定メタル分局ニ於テ定價十分二減ニ
テ買戻スヘシ

第二十六條 電信中央局及工部卿ノ告示ヲ以テ定メタル
分局ニ於テハ四枚以上連續シタル電信切手ヲ其所持人

ノ請求ニ依リ定價十分一減ニテ買戻スヘシ

第五章 電報發送

第二十七條 電報ノ傳送ハ電信中央局及分局ニ於テ之ヲ管スルモノトス

第二十八條 電信中央局及分局ノ癱置並開局ハ工部卿之ヲ告示スヘシ

第二十九條 電報ヲ依托スル時間ハ開局時間ニ限ル可シ但至急官報ハ此限ニアラス

第三十條 發信人ノ請求アルニ非サレハ電報ノ受取證書ヲ交付セス之ヲ請求スルキハ其手数料ヲ納ムヘシ

第三十一條 官報ハ官廳又ハ官吏ノ印ヲ押捺スヘキモノトス但官報タルノ確證アルキハ此限ニアラス

第三十二條 官報ノ原信ヲ證據トシテ差出ストキハ其返

信ヲ官報トシテ發送スルコトヲ得

第三十三條 電信中央局及分局ニ於テ私報ノ發信人タルノ證據ヲ要スルキ其發信人ハ賴信紙ノ端末ニ署名捺印スヘシ

第三十四條 電報ハ其宛名ノ家又ハ本人ニ之ヲ配達スヘシ但受取ルヘキ人名ノ指定アルモノハ此限ニアラス

第三十五條 電報ヲ受取タルモノハ電報受取紙ニ時刻ヲ記入シ記名ノ下ニ捺印シ直ニ之ヲ配達人ニ交付スヘシ

第三十六條 宛名ノ家又ハ本人ニ屬セサル電報ノ配達ヲ受取リタルモノハ其由ヲ附箋シ直ニ之ヲ着信局ニ返付スヘシ

其電報ヲ誤テ開封シタル者ハ更ニ封緘シ其事由ヲ副書スヘシ

第三十七條 電信中央局及分局ヨリ一里ヲ超ヘタル地ニ配達スル電報ハ手數料ヲ要セス但別使配達島嶼配達解船配達ハ此限ニアラス

第三十八條 電信中央局及分局ヨリ一里ヲ超ヘタル地ニ配達スル電報ニシテ發信人ヨリ其配達方ヲ指定セサルモノハ先拂郵便ヲ以テ遞送スヘシ

第三十九條 郵便ニテ遞送スル電信報ハ其郵便稅ヲ納ムヘシ

別使又ハ解船ヲ以テ配達スル電報ハ手數料ヲ納ム島嶼ニ配達スル電報ハ實費ヲ納ムヘシ

第四十條 受信人ニ配達シ能ハサル電報ハ着信局ニ留置キ本人或ハ其委任ヲ受ケタル代人ヨリ請求スルキハ之ヲ交付スヘシ若シ着信ノ日ヨリ六十日以内ニ請求スル

者アラサルキハ之ヲ沒書トナスヘシ

第四十一條 未タ傳送セサル電報ハ其發信人タルノ證據ヲ以テ返還ヲ請求スルトキハ之ヲ還付スルヲアルヘシ

第四十二條 電報ノ傳送ヨリ生シタル損失又ハ異議アルモ電信局ハ一切其責ニ任セス

第六章 尋問改正

第四十三條 受信人電報ノ字句ニ疑惑アリテ尋問ヲ要スルキハ其電報ヲ受取リタル時ヨリ二十四時以内ニ之ヲ請求スルヲ得但其料金ヲ假納スヘシ

電信中央局及分局ニ於テハ其請求ニ應ジ電報ヲ校正シ通信上ニ誤謬ナキキハ假納ノ料金ヲ收入シ若シ誤謬アルキハ之ヲ還付スヘシ

第四十四條 發信人電報ノ字句ニ改正ヲ要スルキハ其電

報ヲ依托シタル時ヨリ七十二時以内ニ之ヲ請求スルヲ
得但發信人タルノ證據ヲ差出スヘシ

第七章 閱覽正寫

第四十五條 發信人又ハ受信人ハ電報發着ノ日ヨリ三十
日以内ニ本人又ハ其代人タルノ證據ヲ以テ發着局ニア
ル原信ノ閱覽ヲ請求スルヲ得又其原信ニ相違ナキノ
證印アル正寫ヲ請求スルヲ得其期限ヲ過キタルハ
更ニ六十日以内ニ之ヲ電信局ニ請求スルヲ得此期限
ヲ過クルハ一切之ヲ許サス
原信ノ正寫ヲ請求スルハ其手數料ヲ納ムヘシ

第八章 電機私設

第四十六條 凡電報氣ノ機器ヲ以テ通信傳話及號報ヲサ
ントスル者ハ工部卿ニ願出ヘシ

第四十七條 私設ノ電線ハ官設ノ電線アラサル地ニ於テ
一人又ハ兩人ノ用ニ供スルモノニ限り許可スルモノト
ス但傳話又ハ鉄道ノ用ニ供スルモノハ官設ノ電線アル
地ニ於テモ許可スルヲアルヘシ

第四十八條 電線私設ノ許可ヲ得タル者ハ電信局ニ於テ
定メタル規約ニ從フヘシ

第四十九條 私設ノ電線ハ最寄電信分局ニ連續設置スヘ
シ但傳話又ハ鉄道ノ用ニ供スルモノハ此限ニアラス

第五十條 私設ノ電線ハ他人ノ電報ヲ傳送スルヲ許サ
ス

第九章 海外電報

第五十一條 海外電報ハ同盟諸國ノ會議ヲ以テ定ムル所
ノ万国條約書ニ據リテ取扱フヘシ

第十章 罰則

第五十二條 第七條ヲ犯シタル者ハ五圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス

第五十三條 第二十二條第二十三條ヲ犯シタル者ハ貳圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス

第五十四條 第三十五條第三十六條ヲ犯シタル者ハ貳圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

第五十五條 第四十六條ヲ犯シタル者ハ二圓以上百圓以下ノ罰金ニ處シ其機器ヲ沒収ス

第五十六條 第四十八條第四十九條ヲ犯シタル者ハ貳圓以上百圓以下ノ罰金ニ處シ其情狀ニ依リ電線私設ヲ禁止ス

第五十七條 第五十條ヲ犯シタル者ハ二月以上二年以下

ノ重禁錮ニ處シ五圓以上百圓以下ノ罰金ヲ附加シ其機器ヲ沒収ス

第五十八條 電線ヲ切斷セスト雖モ電氣ヲ吸引シ易キ物ヲ纏繞シテ不通ニ致シ若クハ其効力ヲ妨害シタル者ハ三月以上三年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第五十九條 疎虞懈怠ニ因リ電信ノ器械柱木條線ヲ損壞切斷シテ電氣ヲ不通ニ致シ或ハ其効力ヲ妨害シタル者ハ二圓以上拾圓以下ノ罰金ニ處ス
其水底電信線ニ係ルモハ五圓以上五拾圓以下ノ罰金ニ處ス

第六十條 電信ノ柱木條線ニ紙鳶ヲ懸ケ若クハ瓦礫其他ノ雜物ヲ擲チ又ハ柱木及測量標木ニ獸畜ヲ繫キ若クハ

貼紙シ戲書シ又ハ柱木ノ記號及ヒ測量標木ヲ毀棄汚穢シタル者ハ五錢以上一圓九十五錢以下ノ科料ニ處ス

第六十一條 政府ノ指定シタル水底電信線路内ニ於テ艦船ヲ繫泊シ又ハ漁業採藻ヲ爲シ土砂ヲ掘鑿シ又ハ電信線ノ號標ニ舟筏ヲ繫キ又ハ其號標ヲ毀棄シタル者ハ五圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

政府ノ指定シタル電信線ノ號標距離内ニ於テ前項ノ所爲ヲ行ヒ又ハ航行シタル者亦同シ

第六十二條 偽計又ハ威力ヲ以テ電報ノ傳送配達及架線其他ノ工事ヲ妨害シ若クハ之ヲ阻止シタル者ハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第六十三條 已レニ属セサル電報ヲ開封シ若クハ私用シ

或ハ毀棄汚穢抑留隱匿シ若クハ受取人ニ非サル者ニ交付シ及其情ヲ知テ之ヲ收受シタル者ハ一月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第六十四條 電信切手ヲ偽造變造シ又ハ其情ヲ知テ之ヲ使用シタル者ハ一年以上五年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第六十五條 已ニ貼用シタル電信切手ヲ再ヒ貼用シタルモノハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

第六十六條 電信事務ヲ奉スル者前數條ノ罪ヲ犯シタル時ハ各本刑ニ照シ一等ヲ加フ

第六十七條 電信局長ノ許可ヲ得ヌシテ通信室ニ入りタル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス之ヲ入レタル者ハ一等ヲ加フ

第六十八條 電信事務ヲ奉スル者私報ノ旨意ヲ漏泄シタル
ルキハ三月以上三年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十
圓以下ノ罰金ヲ附加ス但法律規則ニ從ヒ開披説明スル
ハ此限ニアラス

官報及局報ノ旨意ヲ漏泄シタル者ハ一等ヲ加フ

第六十九條 電信事務ヲ奉スル者電信紙ニ貼用シタル切
手ヲ剝取リタルキハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ
三圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

其未タ消印チナサル切手ヲ剝取タル者ハ刑法竊盜ノ
本條ニ照シテ處斷ス

第七十條 電信事務ヲ奉スル者故ナクシテ通信ノ依托ヲ
拒ミタルキハ四圓以上四十圓以下ノ罰金ニ處ス

第七十一條 疎虞懈怠ニ因リ電報ヲ遺失シ又ハ傳送配達

ヲ延滞シタル者ハ一圓以上一圓九十五錢以下ノ科料ニ
處ス

七十二條 配達人謝儀若クハ不當ノ賃錢ヲ要求シタル
キハ五十錢以上一圓九十五錢以下ノ科料ニ處ス

第七十三條 第五十八條第六十二條第六十四條第六十五
條ニ記載シタル罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケサル者ハ刑

法未遂犯罪ノ例ニ照シテ處斷ス

第七十四條 第六十四條第六十九條ニ記載シタル罪ヲ犯
シ輕罪ノ刑ニ處シタル者ハ六月以上二年以下ノ監視ニ
附ス

第八類 度野衝

明治三十年八月五日

今般度量衡取締條例并檢査規種類表等別紙ノ通相定候條便宜ノ場所見計ヒ製作所賣捌所ヲ設ケ從來ノ幣害ヲ除キ候様厚ク注意施行可致此旨相達候事

但度量衡原器及ヒ檢印并器械配達檢査計算諸表等大藏省ヨリ配達候條同省ヨリ可受取且製作請負人申付候者ノ居所姓名等同所へ申立免許鑑札可受取尤右日限ハ各地方管廳東京ヲ距ル百里以內ハ此達書到着ノ日ヨリ三十日限リ百里以外二百里迄ハ同四十日限リ二百里以外三百里迄ハ同五十日限リ三百里以外ハ同六十日限リ可申出事

度量衡取締條例

第一條 度量衡三器權衡ハ桿秤天秤並分銅相屬シテ三器ノ一トス 向後製作之儀ハ各地方ニ於テ製作所每器一ヶ所ツ、製作請負人每器一人宛ト相定メ其管廳ニ於テ身元人物相當ノ者相撰ニ新可申付事

右各管廳ニ於テ製作請負人申付候節其居所姓名等大藏省へ申立同省ヨリ製作免許鑑札請取可下候事但製作請負人休業イタシ代業ノ者申付候節ハ右下渡シ候鑑札大藏省へ相納メ更ニ同省ヨリ新鑑札請取可下度事

第二條 従前ノ枴量改役座方ハ製作所ニ於テ出來ノ新器發賣ノ日限ヨリ廢止候事

但従前ノ枴量改役座方ハ自今廢止スト雖モ第一條揭示ノ通り身元人物相當ニ候得ハ更ニ製作請

負人ニ相撰ニ候儀不若事

第三條 三器賣捌所ハ東京ハ各器五ヶ所或ハ六ヶ所宛西京ハ二ヶ所或ハ三ヶ所宛大坂ハ三ヶ所或ハ四ヶ所宛其餘ハ各地方ニ於テ管轄地ノ廣狹ニ應シ土民ノ便利ヲ計リ適宜ノ場所見計ヒケ數相定メ其管廳ニ於テ身元人物相當ノ者相撰ニ各器賣捌人新ニ可申付事

右各管廳ニ於テ賣捌人中付候節賣捌免許鑑札大藏省ヨリ可相渡ニ付同省ヨリ請取其管廳ノ印章相調シ本帳割印押切下度シ然ル上其者ノ居所姓名等直ニ同省へ可届出事

但賣捌人体業イタシ代業ノ者申付候節ハ右下渡候鑑札取上ケ更ニ新鑑札下渡シ其段大藏省へ可

届出其節取上ケ候鑑札ハ同省へ返納可致事

第四條 各器製作所賣捌所共免許相成候ハ、何製作所賣捌所ト大書イタシ候標札相掲ケサスヘキ事

第五條 度量衡原器ノ儀ハ各原器ニタ通りツゞ大藏省ヨリ各管廳へ配達候條一ト通りハ其管下製作請負人へ下度向後各器製作ノ規範ト致サセ一ト通りハ其管廳ニ備置各器検査ノ照準イタスヘキ事

右度量衡原器ニ附屬ノ器械并各器ノ検査印章及度量衡製作順序番号印等は亦大藏省ヨリ配達候事

第六條 度量衡取締條例并度量衡種類表ハ三器製作所心得ノ爲メ各器製作請負人へ一部ツゞ下渡スヘキ事

第七條 賣捌所ニオイテ新製ノ器發賣日限ノ儀ハ各製作所ニテ新製ノ器概テ出來ノ上一般へ布告ニ可及ニ付右出來ノ期限ヲ豫定シ大藏省へ可届出事

第八條 各管廳ニ於テ其管下製作所ニテ出來ノ各器改メ方ハ別冊度量衡検査規則ノ通り検査ノ上一々新器検査ノ印章打込下渡スヘキ事

舊器改メ方ハ新器發賣ノ日ヨリ日數三百日ト定メ各管廳ニ於テ其管下ヨリ舊器持出サセ相改可申尤別冊度量衡検査規則ノ通り検査ノ上一々舊器検査ノ印章打込ニ可下渡事

但印章打込ケ所ハ原器ニ打込有之候ケ所ノ通りタルヘク尤舊器ハ舊章ニ重複セサル様可打込事
第九條 舊器改方ハ第八條ノ通りタル可シト雖モ各

管廳ニ於テ改方遍ク行届候様專ラ注意スヘク就テ
 ハ管轄地ノ廣狹ニ應シ土民ノ便利ヲ計リ適宜ノ場
 所見評ヒ出張所ヲ設ケ官員分配イタシ候等ハ都テ
 其地便宜ニ任スヘキ事

右舊器改方出張所ヲ設ケ候向ハ出張所ケ所取極メ
 候上大藏省ヘ届出ヘキ事

右出張所ケ所届出次第同省ニ於テ舊器検査印章一
 ケ所ニ付一ト通リツ、尙又可相渡ニ付同省ヨリ請
 取各出張所ヘ配達スヘク尤出張所ニ於テ改方照準
 ノ原器ハ兼テ相渡有之候原器ニ準シ製作所ニテ出
 來ノ三器各管廳ニ於テ検査ノ上印章打込每器各出
 張所ノ數ニ應シ一ト通リツ、配達イタスヘキ事

第十條 三器ノ税額及ヒ製作所賣捌所ノ利益ハ左之

通タルヘキ事

三器製作ノ諸材料并一切ノ諸費ヲ出來品ノ高ニ割
 合之ヲ各品各所ノ原價ト立右原價ヘ貳割四分ヲ添
 へ之ヲ賣捌所ノ通價ト定ム其貳割四分ノ内

壹分但ニ割四分

税金

差引殘

貳割三分

製作所利益

譬へハ秤壹挺ニ付

金壹圓

原價

金二拾四錢

二割四分増價

合金壹圓二拾四錢

賣捌所ノ通價

内

金壹圓

原價

金壹錢

税金

差引殘

金廿三錢

製作所利益

右税金ハ検査印章打込下渡シ候器物ニ課シ各器製作請負人ヨリ取立ヘシ尤其計算等委曲ハ第十二條ニ參照可致事

右利益製作賣捌兩所ノ割合ハ工作ト賣捌ノ多少ニ應シ申合ノ上適宜ニ取定メ候テ不苦尤原價并通價ノ儀ハ決テ右製限ニ超ヘ候儀相成ヲサル旨可申渡置事

一字ヲ加フ

製作所賣捌所共私ニ通價ヲ高下オメシ賣買候儀不和成若シ犯ス者ハ律ニ照シ處分スヘキ事
但減價ハ製作所ヨリ爲書上且増減ノ都度々々届

出サスヘキ事

賣捌所ニテハ右通價ノ外製作所ヨリ道程ノ遠近ニ應シ運賃ヲ添ヘ其地ノ定價ヲ立候ハ不苦事

但各地ノ定價ハ賣捌所ニ於テ通價并運賃ノ割合書添ヘ其管廳ヘ届ケ置カスヘキ事

第十一條 各地ノ賣捌所ハ何地ノ製作所ヨリ買卸シ候トモ隨意タルベシ且同業中互ノ取引ハ不苦ト雖モ自儘ニ枝店取次所等取設ケサセ候儀ハ不相成事
第十二條 舊新度量衡検査員數并税金等計算ノ便ニ供センガ爲メ左ノ計算表大藏省ヨリ各管廳ヘ配達候事

一 器度量衡検査員數計算表

右二枚ツゞ員數記載例ヲ添ヘ配達候條員數記載ノ

上一枚ハ管廳ニ備置一札ハ同省へ可差出事

一 新 度量衡検査員數計算表

右六枚 分三年 ヅ、員數記載例ヲ添へ配達候條本年ヨ

リ明後年迄三年間各年員數記載ノ上一枚ハ管廳ニ

備置一枚ハ每翌年一月限リ同省へ可差出事

一 新 度量衡税金計算表

右六枚 分三年 ヅ、員數記載例ヲ添へ配達候條本年ヨ

リ明後年迄三年間各年員數記載ノ上一枚ハ管廳ニ

備置一枚ハ每翌年一月限リ同省へ可差出事

度量衡税金ハ第十條揭示ノ通り検査印章打込下渡

シ候器物ニ課シ候儀ニ付各器製作請負人ヨリ年々

毎月兼テ検査濟器物ノ員數并其原價通價税額等ノ

調書爲差出置每翌年一月ニ至リ同人ヨリ前年分ノ

税金取纏メ爲差出 新 度量衡検査員數計算表ニモ參

照イタシ調査精算ノ上右税金計算表ニ添へ同日限

リ同省へ可相納事

第十三條 製作所ニテ検査印無之品賣出シ又ハ他人

猥リニ製作イタシ候儀不相成若シ犯ス者ハ其品取

上ケ律ニ照シ處分スヘキ事

但尺ハ尺杖等全ク一時假用ノ爲メ目盛リイタシ

候類枱ハ芋烏芋等ヲ斗リ候爲メノ箱ヲ製シ賣候

類ハ例外タルヘキ事

第十四條 製作所ノ外尺秤ノ目盛直シ枱ノ縁鐵打替

及斗概ノ修復等他人自儘ニイタシ候儀不相成若シ

犯ス者ハ其品取上ケ律ニ照シ處分スヘキ事

第十五條 賣捌所ニ於テ製作ハ一切禁制タリト雖モ

權衡賣捌所ニテハ緒紐附替ノ儀差許候間右緒紐結
 ヒ方目印等兼テ製作所へ打合セ爲心得置へキ事
 但緒紐代手数料等ハ最寄同業中申合ノ上定價相
 立サセ其管廳へ書上ケ爲置へキ事
 權衡製作所賣捌所ノ外他人自儘ニ緒紐附替候儀不
 相成若シ犯ス者ハ其品取上ケ律ニ照シ處分スへキ
 事

第十六條 製作所賣捌所ハ一般ノ工商ト同様ニテ別
 段威權ケ間敷振舞ハ一切相成ラサル事

第十七條 製作所賣捌所共其管廳官員時々見廻リ諸
 帳面類點檢ノ上書上ケ原價ノ當否及製作高賣揚高
 等審査可致且米穀酒醬反物等ノ商家へモ時宜次第
 同様見廻リ用器ノ正否探偵イタスへキ事

製作所賣捌所共此條ニ觸レ不相當ノ儀有之候ハ、
 管廳ニ於テ其職業差止メ代人申付其段大藏省へ可
 届出且其犯狀ニ依リテハ律ニ照シ處分スへキ事

第十八條 新製ノ器發賣ノ日ヨリ三器共賣捌所ノ外
 賣買ヲ禁ス自用ノ品舊新器検査印章有之分賣拂ヒ
 度者ハ同所へ差出候ハ、相當ノ代價ヲ以テ買取ル
 へキ事

但向後三器ハ平人賣買一切停止タリト雖モ秤錘
 皿并枱縁鏡弦鎖等取離シ古鐵トシテ賣買イタシ
 或ハ鑄潰シ候儀ハ不苦事

第十九條 舊器改メ三百日ヲ過キ検査印章無之器商
 業賣買ノ際ニ相用候事不相成若シ犯ス者ハ律ニ照
 シ處分スへキ事

第二十條 従前ノ枱座秤座及尺工ハ自今製作賣捌共一切停止タリト雖モ舊器検査印章打込相成候分ハ新器發賣ノ日ヨリ百五十日ノ内ニ各器賣捌所ニ於テ相當ノ割引ヲ以テ爲買取ヘキ事

右舊器検査印章打込相成候分賣捌所ニ於テ買取方ハ各管廳ニ於テ兼テ賣捌人へ申論シ各器買取方目途相立割引ヲ以テ買取候上賣出シ候様可爲致事

但舊器買取員數ハ舊器買取日數百五十日ノ後取調出來次第各管廳ニ於テ賣捌人ヨリ爲書出大藏省へ差出スヘキ事

第二十一條 舊器賣買ノ儀ハ第十八條第二十條掲載ノ通りニ候得共舊器賣買ニ付テハ收税ニ不及事

第二十二條 此條例中一般ノ人民ニ係リシ儀ハ各地ノ

區戸長へモ篤ト爲相心得取締筋ニ付萬一違犯ノ者有之節ハ速ニ其管廳へ訴出候様兼テ可申付置事

第九類 贋造通貨

明治五十九年四月十九日
第五十七號布告

銀行又ハ爲替方又ハ兩替屋又ハ官廳ニ於テ備入候鑑定人等金銀銅貨紙幣ヲ鑑定ノ節贋造品取扱規則左之通相定候條此旨布告候事

贋造金銀銅貨紙幣等取扱規則

第一條 新金銀銅貨紙幣等贋造品ハ詳ニ其原由及ヒ持主ノ宿所姓名ヲ尋ネ其面前ニ於テ斷截シ速ニ其最寄警察出張所或ハ屯所或ハ區戶長ニ差出シ其顛末ヲ申立ツヘシ若シ官廳ニ關スルキハ該廳ヨリ警察官署ニ通知スヘシ

但持主立會ハサル時ハ必ス代理人ヲ出サシムヘシ遠隔ノ地ヨリ遞送シ來レル者ハ立會人ヲ取リ

テ之ヲ斷截シ速ニ遞送主へ報告スヘシ

第二條 鑑定ヲ誤リ正貨紙幣ヲ斷截シタル時ハ改人ヨリ持主へ其斷截シタル正貨紙幣ヲ其同等ノ品ト引換相渡シ其斷截シタル紙幣ハ事由ヲ詳記シテ管轄廳へ引換ヲ乞フヘシ

第三條 若シ正價定メ難キモノ有之節ハ其原由及持主ノ宿所姓名ヲ分明ニ記載シ持主ノ面前ニ於テ其品ヲ封シ持主ヲシテ之ニ封印セシメ鑑定者ヨリ管轄廳へ差出スヘシ然ル時ハ該廳ニ於テ詳細吟味ノ上全ク正品ニシテ其製充分ナラス通用ノ際人民ノ疑ヲ生スヘキモノハ直ニ持主へ引換渡スヘシ其贋造品ハ第一條ニ依ル

第四條 古金銀貨幣贋造品ハ持主又ハ代理人ノ面前

ニ於テ斷截シ直ニ其持主又代理人へ還付スヘシ

第五條 贋造ヲ知ルト雖モ斷截セスシテ持主ニ還付シ又ハ申立ヲ等閑ニスル等ハ相當ノ處罰ヲ爲スヘシ

第十類 得遺失物

明治九年四月十九日
第五十六號布告

遺失物取扱規則左之通相定候條此旨布告候事

遺失物取扱規則

第一條 凡遺失物ト稱スルハ自ラ其返失スルヲ覺
ラス及ヒ其所在ノ明カナラサルモノヲ云フ故ニ若
シ其物ヲ得ルニ臨テ物主其場ニ就テ其主タルヲ
証明スルニ於テハ直ニ之ヲ返還シ遺失物ヲ以テ論
スルヲ得ス

第二條 凡遺失ノ物ヲ得レハ五日内ニ其主ニ還シ其
主分明ナラサレハ之ヲ官ニ送ルヘシ官之ヲ榜示シ
壹年内其主ナキ時ハ之ヲ得者ニ給ス

第三條 凡遺失者ハ其遺失スル物品ノ模様員數并ニ

遺失ノ日時場所等ヲ可成丈ケ詳細ニ記載シ速カニ官ニ届出ヘシ但得者ニリ其返還ヲ得ル時モ亦更ニ其旨ヲ届出ヘシ

第四條 凡遺失ノ物ヲ得レハ之ヲ其主ニ還スト雖其費用ヲ償ハシムルヲ得且得者ニ報勞ノタメ其物價百分ノ五ヨリ少カラス貳拾ヨリ多カラサル金圓ヲ給フヘシ若シ物主得者ト其價格ヲ争フ時ハ官之ヲ評價人ニ托シテ其價ヲ定ム

第五條 凡遺失物ヲ得ルニ物品盜賊ニ係ルモノハ直ニ官ニ送ルヘシ官之ヲ其主ニ還シ止タ其費用ノミヲ償ハシム

第六條 凡官私ノ地内ニ於テ埋藏ノ物ヲ掘得ル者ハ並ニ官ニ送り地主ト中分セシム但其主分明ナルモ

ノ及ヒ盜賊ニ係ルモノハ此限ニ在ラス

第七條 凡遺失ノ物ヲ得ルニ若シ其物耐久シ難クシテ其主分明ナラサル時ハ迅速ニ之ヲ官ニ送ルヘシ官之ヲ公賣シ其代價ヲ領置シ榜示シテ處分スルヲ第二條ノ如シ

第八條 凡家畜ノ類他所ニ逸走スルモノハ之ヲ遺失物ト稱スルヲ得スト雖其主ヨリ之ヲ官ニ報シ及ヒ得者ニ其費用ト報勞金ヲ給與スルヲ第三條第四條ニ同シ若シ他人ノ財産ヲ毀損スル時ハ律ニ照シテ處分ス

第九條 凡逸走スル畜類ヲ得タル者其主分明ナラサレハ之ヲ官ニ送ルヘシ若シ八日內其主ナケレハ官之ヲ公賣シテ得者ニ其費用ヲ償ヒ仍ホ代金ノ剩餘

アルモノハ之ヲ官ニ領置シ榜示シテ處分スルヲ第二條ノ如シ

第十條 凡遺失物及ヒ逃走畜類ノ官ニ係ルモノハ官ヨリ得者ニ其費用ト報勞金ヲ給スルヲ私物ニ異ナルヲナシ

第十一條 凡警察官吏タル者ハ所部内外ヲ問ハス遺失物ヲ得シハ速ニ之ヲ官ニ送り全ク其主ニ還付シ其主ナケレハ之ヲ官ニ沒ス

第十二條 凡一功應禁ノ物ヲ得レハ遺失及ヒ埋藏ヲ論セス並ニ官ニ沒ス

第十三條 凡公私債証書地券諸鑑札等ノ類ハ遺失物ヲ以テ論スルヲ得スト雖モ物主ハ得者ニ其費用ヲ償フヘシ

第十四條 凡遺失物及ヒ逃走畜類ヲ得若クハ埋藏物

ヲ戶掘得テ官私ニ全ク送還セス或ハ物主ノ其主タルヲ証明スルニ冒認シテ返還セサル者ハ並ニ律ニ照シテ處分ス

明治十四年四月三十一日
官布告第一二號

明治九年四月第五十六號布告遺失物取扱規則第六條左ノ通改正候條此旨布告候事

第六條 官私ノ地内ニ於テ埋藏ノ物品ヲ掘得ルモノハ之ヲ官ニ送ルヘシ其主分明ナラサルモノハ地主ノ所有ニ歸スヘシ若シ借地人其借地ヨリ掘得タルキハ之ヲ地主ト中分セシム
但盜賊ニ係ルモノハ此限ニアラス

第十一類 富籤

明治二十五年二月二十
四日 第十五號 布告

明治元年十二月二十三日ノ布告ニ原ツキ富籤賣買ノ
牙保幫助ヲ爲シ及富籤ヲ購買シタル者處分方左ノ通
制定ス

第一條 凡富籤賣買ノ牙保若クハ幫助ヲ爲シタル者

ハ一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五拾

圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二條 凡富籤ヲ購買シタル者ハ其價ヲ拂ヘタルト

未ダ拂ハサルトモ問ハス二十日以上四月以下ノ重

禁錮ニ處シ四圓以上四拾圓以下ノ罰金ヲ附加ス他

人ノ名ヲ借リテ購買シタル者及他人ヨリ讓リ受ケ

タル者亦同シ

第三條 第一條第二條ノ罪ヲ再犯シタル者ハ同條ニ
 定メタル刑期金額ノ二倍ニ處ス但初犯ニ科シタル
 刑期金額ニ下ル下ヲ得ス

第四條 富籤ニ關スル犯罪ヲ告發シタル者ニハ其徵
 スル所ノ罰金ノ半額ヲ給與ス

第五條 富籤ニ關スル罪ヲ犯シ事未ダ發覺セサル前
 ニ於テ官ニ自首シタル者ハ其罪ヲ免ス再犯ニ係ル
 者ハ自首スト雖モ其罪ヲ免セス

再犯ニ係ル者ハ自首スト雖モ其罪ヲ免セス

第六條 富籤ニ關スル犯罪ニ因テ得タル財物ハ之ヲ
 沒收ス自首ニ因テ罪ヲ免シタル者ト雖モ財物沒收
 ハ尙ホ前項ニ依ル

右奉 勅旨布告候事

太政大臣 三條實美
 司法卿 大木喬任

第十二類 請願

明治十五年十二月十二日
第五十八號太政官布告

請願規則左ノ通制定ス

請願規則

第一條 人民各自ノ利害ニ關シ行政上ノ處分ヲ請願セ

ントスル者ハ左ノ條規ニ依ルヘシ

第二條 郡區長及戶長職務内ノ事件ハ郡區長戶長ニ請

願スヘシ郡區長戶長ノ指令ニ服セサル者ハ府知事縣

令ニ請願シ府知事縣令ノ指令ニ服セサル者ハ主務卿

ニ請願シ主務卿ノ指令ニ服セサル者ハ太政官ニ請願

スルコトヲ得

府知事縣令警視總監職務内ノ事件ハ府知事縣令警視

總監ニ請願スヘシ府知事縣令警視總監ノ指令ニ服セ

サル者ハ主務卿ニ請願シ主務卿ノ指令ニ服セサル者
 ハ太政官ニ請願スルコトヲ得
 各省卿職務内ノ事件ハ其卿ニ請願スヘシ其指令ニ服
 セサル者ハ太政官ニ請願スルコトヲ得
 第三條 凡ソ請願スル者ハ書面ヲ以テスヘシ口陳スル
 コトヲ許サス官署ノ決メニ應シテ開陳スルハ此限ニ
 在ラス
 第四條 請願書ハ請願人自ラ署名捺印シ族籍住所ヲ記
 シ戸長ニ請願スル者ヲ除ク外住所戸長ノ奥印ヲ受ク
 ヘシ其連名ヲ以テ請願スル者ハ各人自ラ署名捺印シ
 族籍住所ヲ記シ其總代又ハ請願發起人アルキハ其由
 ヲ肩書スヘシ戸長ノ奥印ヲ受ルハ前例ニ同シ
 第五條 府縣郡區總代又ハ結社總代ノ名ヲ以テ請願ス

ルコトヲ得ス

但成法ニ制定セラレタル會社ハ此限ニ在ラス

第六條 請願書ヲ上呈スルニハ代人ヲ以テスルコトヲ
 許サス數人連名スル者ハ請願人中ニ於テ三名以下ノ
 總代人ヲ撰ヒ之ニ委託スヘシ
 第七條 請願書ハ郵便ヲ以テ上呈スルコトヲ得
 第八條 上司ニ呈スル請願書ニハ其經歷スル所ノ官署
 ノ指令書ヲ添フヘシ
 第九條 請願書ノ郵達ヲ得タル各省若シ其主務ニ非サ
 ルキハ直チニ之ヲ主務省ニ移シ其由ヲ請願人ニ通知
 スヘシ
 第十條 太政官ニ於テ請願ヲ裁可スルキハ主務省ニ付
 シテ處分セシムヘシ

第十一條 太政官ノ裁令ヲ經タル者ハ更ニ請願スルコトヲ得ス又裁判所ニ訴フルコトヲ得ス

第十二條 請願ヲ名トシテ行政處分ヲ拒ムコトヲ得ス

第十三條 凡ソ事ノ建白ニ屬スヘキ者ハ人民各自ノ利害ニ係ルヲ以テ請願スト雖モ受理セス

第十四條 行政處分ノ既ニ五年ヲ經タル者ハ請願ヲ受理セス

第十五條 請願人第二條ノ順序ヲ經ス及第三條第四條

第五條第六條第八條第十一條ノ規程ニ循ハサル者ハ受理セス

第十六條 請願書ニ侮辱誹毀ノ語ヲ用ヒ及第二條ニ示

ス所ノ官署ノ外ニ向ヒ請願スル者ハ受理セス

第十七條 條規ニ違ヒ受理セラレサルノ請願ヲ以テ強テ

受理ヲ請フ者ハ十一日以上一年以下ノ輕禁錮ニ處ス

其連名請願スル者ハ情ヲ知ラサル者ヲ除外各人均

ク罪ヲ論ス其發起人ハ一月以上二年以下ノ輕禁錮ニ

處シ若シ請願人ノ外教唆者アルキハ發起人ト同シ罪

ヲ論ス

其囂聚ニ涉ル者ハ刑法ニ依テ處分ス

第十八條 請願人官吏ニ對シ抗論シ喧擾ニ涉ル者ハ十

一日以上一年以下ノ輕禁錮ニ處ス

其侮辱ニ涉ル者ハ刑法ニ依テ處分ス

第十九條 請願書ハ新聞紙其他ノ文書ヲ以テ公行スル

コトヲ許サズ犯ス者ハ罪前條第一項ニ同シ

第二十條 請願ニ由リ人ヲ誣告スル者ハ刑法ニ依テ處

分ス

明治四年八月十日
大政官布告

諸願伺書式ノ事

諸願伺届等自今本紙扣共界紙へ認め大主意ヲ摘シ本文ノ前行二三字引下ケ其儀ニ付願或ハ伺或ハ届ト相認め可指出尤自分一身ニ拘リ候儀ハ美濃紙ニ相認め可差出且前日拾出候願伺書ノ儀ニ付後口再書面差出候節ハ某月某日某事件ニ付云々ト相認め可差出事
但是迄其事件ノ大趣意ヲ上包ニ張紙ニテ指出來候處以來ハ直ニ書載可申事

明治四年九月十日
布告

是迄諸願伺書へ附紙ニテ御沙汰相成來リ候處自今本紙へ直ニ朱書シ捺印ノ上相達候條紙尾ニ餘白ヲ存シ可相認事

明治六年第百五
號布告

從前人民諸願伺等聊ノ事件ニテ其本人へ戸長差添管轄應へ罷出候趣ノ處自今一ト通リノ事件ハ可成丈封書ヲ以テ郵便ニ托シ管轄應へ差出シ指令ノ儀モ同様郵便ヲ以本區會所へ相達候様可致尤各地方官ニ於テ實際見計ヒ本人直ニ持參爲致候儀等便宜斟酌不苦候事

明治八年第五
號布告

各地寄留ノ者諸願伺届等自今其寄留地ノ管轄へ可差出此旨布告候事

但事柄ニ依リ本管應へ差出候儀ハ其便宜ニ任スベキ事

第十三類 郵便條例

明治十五年十二月十六日第九號布告

郵便條例別冊之通制定シ明治十六年一月一日ヨリ施行右奉勅旨布告候事

別冊

郵便條例

第一章 郵便物

第一條 凡郵便物別テ四種ト爲ス

- 一 書狀
- 二 郵便葉書
- 三 毎月一回以上發行スル定時印刷物及其附録
- 四 書籍、帳簿、各種ノ印刷物、寫眞、書畫、繪圖、郵紙、營業品ノ見本及雛形

第二條 何品ヲ問ハス此條例ニ抵觸セサルモノハ第一種郵便物トナスヲ得

第三條 封緘シタル郵便物ハ第一種郵便物トナスヘシ

第四條 第二種郵便物ヲ他種ノ郵便物ト合装スルトキハ總テ第一種郵便物トナスヘシ

第五條 第二種郵便物左ニ記載シタル所爲アルトキハ

第一種郵便物トナスヘシ

一 截斷又ハ破却シタルモノ

一 税額印面ニ文字ヲ書シタルモノ

一 税額印面ニ郵便切手ヲ貼付シタルモノ

一 紙ニ配達又ハ返戻ノ爲其他ノ品ヲ貼付シタルモノ

一 一葉ヲ析リ之ヲ全ク糊着シ又ハ數葉ヲ合セ之ヲ全ク糊着シタルモノ

一 表面ニ音信文ヲ記載シタルモノ

第六條 第三種郵便物ハ其發行人ニリ定時印刷物タル

ヲ証シテ驛遞總官ノ認可ヲ受ケ驛遞局認可ノ文字ヲ

印刷スヘシ但其文字標題番號及發行ノ年月日ヲ見易

カラシムヘシ

其附録ハ其本紙ノ標題番號及發行ノ年月日ヲ印刷シ

冊子トナサスシテ本紙ニ添付シ且本紙ノ重量ニ超過

セサルモノニ限ルヘシ

第七條 第三種第四種郵便物ハ封緘セサルモノトス

第八條 第三種第四種郵便物ニ音信文又ハ暗號隱語ヲ

筆書スルトキハ第一種郵便物トナスヘシ

第九條 營業品ノ見本及雛形ハ雙方又ハ一方營業者ト

往復スルモノニ限ルヘシ

第十條 營業者ニアラサルモノ、間ニ往復スル見本及
雛形ハ第一種郵便物トナスヘシ

第十一條 異種ノ郵便物ヲ合装スルトキハ總テ其種類
中高額税ヲ課スヘキ郵便物トナスヘシ但第四條ニ記
載シタルモノハ此限ニアラス

第十二條 郵便物ノ重量ハ郵便切手封皮帶紙ノ重量ヲ
合算スルモノトス

第十三條 第三種第四種郵便物營業品ノ見本ハ一個ノ
及雛形ヲ除ク重量三百目ニ超過スヘカラス

第十四條 營業品ノ見本及雛形ハ一個ノ重量四十八匁
ニ超過スヘカラス

第十五條 郵便物ノ大サハ曲尺ニテ長一尺二寸幅八寸
厚五寸ニ超過スヘカラス

第十六條 左ニ記載シタルモノハ郵便物トナスヘカス

- 一 毒藥、劇藥、流動物、流動爆發燃燒腐敗シ易キ物、字化ス
ヘキ物、動物、植物、及鋒刃器、硝子器、陶器、等ノ損傷シ易
シ又他ノ郵便物ヲ損害スヘキ物品
- 一 風俗ヲ害スヘキ文書、畫圖、寫真及物品
- 一 金銀、寶玉
- 一 貨幣但第十章ノ規則ニ從フモノハ此限ニアラス

第二章 郵便税

第十七條 郵便税ハ郵便物ノ種類ヨ從ヒ其額ヲ定ム

第一種郵便物 重量二匁毎ニ亦同シ未滿

第二種郵便物 一葉 一錢

第三種郵便物 一號一個重量十六匁毎ニ十六匁未滿一錢
二號又ハ二個以上一束重量十六匁毎ニ十六匁未滿亦同シ二錢

第四種郵便物 重量八匁毎ニ亦八匁未滿 二錢

第十八條 郵便税ハ郵便切手ヲ其郵便物ニ貼付シタルヲ以テ之ヲ納メタルモノトス郵便封皮葉書帶紙ハ切手ヲ貼付シタルト同般ナリトス但驛遞總官ト約定アルモノハ此限ニアラス

第十九條 納税ニ用ヒタル郵便切手并封皮葉書帶紙ノ税額印面ハ郵便局ニ於テ消印スヘシ

第二十條 郵便税ニ過納アルモ己ニ其税額印面ニ消印シタル後ハ之ヲ還付セス

第二十一條 未納税又ハ不足税ノ郵便物ハ受取人ヨリ其額ノ二倍ヲ徴収スヘシ

受取人其郵便物ヲ受取リタルトキハ其納税ヲ拒ムヘカラス

受取人其郵便物ヲ受取ラスシテ差出人ニ還付スルトキハ其差出人ヨリ其額ノ三倍ヲ徴収スヘシ

第二十二條 未納税又ハ不足税ノ郵便物配達シ能ハス差出人ニ還付スルトキハ其額ノ二倍ヲ徴収スヘシ差立前ニ係ル未納税又ハ不足ノ税郵便物ヲ差出人ニ還付スルトキハ亦同シ

第二十三條 第十三條第十四條第十五條ニ背戻スル郵便物ヲ差出人ニ還付スルトキハ未納税又ハ不足税ノ二倍ヲ徴収スヘシ

第二十四條 人民ヨリ官廳ニ差出ス郵便物ハ郵便税完納ニ限ルヘシ未納税又ハ不足税ノモノハ差出人ニ還付シ其額ノ二倍ヲ徴収スヘシ

第二十五條 未納税又ハ不足税ヲ徴収スルトキハ郵便

局ニ於テ郵便切手ヲ郵便物貼付シ其切手ニ未納又ハ不足印ヲ捺シ其証トナスヘシ

第三章 郵便切手封皮葉書帶紙

第二十六條 郵便切手郵便封皮郵便葉書帶紙ハ日本政府ニ於テ發行セシモノタルヘシ

第二十七條 郵便切手封皮葉書帶紙ハ郵便税納ノ証トナシ又郵便切手ハ書留手数料并別配達科納濟料ノ証トナスモノトス

第二十八條 郵便封皮ヲ用ユルトキ其郵便物ノ重量ニ因テ税額ニ不足ヲ生スルトキハ郵便切手ヲ以テ之ヲ補フヘシ

第二十九條 郵便封皮ノ價位ハ其印面ノ税額ニ製造費ヲ加ヘタル額ヲ以テ驛遞總官之ヲ定ムベシ

第三十條 郵便帶紙ハ第三種郵便物一號一箇ヲ以テ達スルモノニ用ベシ但重量十六匁以下ノ物ニ限ルベシ

第三十一條 郵便帶紙ハ第三種郵便物發行人若クハ賣捌人ノ請求ニ依リ驛遞局ニテ賣下クヘシ

第三十二條 郵便切手封皮葉書ヲ賣ルモノハ驛遞總官ノ免許ヲ受ケ郵便切手賣下所ノ標板ヲ掲クベシ

第三十三條 郵便切手封皮葉書ハ郵便局郵便受取所郵便切手賣下所ノ外ニ於テ買賣スベカラス

第三十四條 郵便局郵便受取所郵便切手賣下所ハ郵便切手封皮葉書ノ印面税額ヨリ低價ヲ以テ賣ルヘカス

第三十五條 郵便封皮葉書帶紙ノ税額印面ヲ切取リ郵便切手ニ代用スルモ其効用ヲ有セス

第三十六條 郵便切手并封皮葉書帶紙ノ汚斑毀損捺印

アルモノ及税額印面不明瞭ナルモノハ其効用ヲ失フ然レモ其未タ使用セサルモノニ限リ二人以上ノ証人ヲ立テ其原由ヲ明瞭ナラシムルトキハ驛遞局ニ於テ定價十分二減ニテ買戻スヘシ

第三十七條 驛遞局及一等郵便局ニ於テハ四枚以上繼續シタル郵便切手并封皮葉書帶紙ヲ其所持人ノ請求ニ依リ定價十分一減ニテ買戻スヘシ

第四章 免税郵便

第三十八條 郵便郵便爲替及貯金ノ事務ニ關スル郵便物ハ其税ヲ免除ス

第三十九條 免税郵便物ハ驛遞局郵便局府縣廳府縣所屬廳群區役所并以上各廳派出官吏相互ノ間又ハ之ト往復スルモノニ限ルヘシ

第四十條 免税郵便物ハ表面ニ郵便事務爲替貯金事務ノ文字ヲ記載スヘシ

第四十一條 官廳ニ宛テ又ハ官廳ヨリ差出ス免税郵便物ハ官氏名若クハ廳名課名ヲ記載シ派出官吏ニ宛テ又ハ派出官吏ヨリ差出ス免税郵便物ハ官氏名ヲ記載スヘシ

第四十二條 人民ヨリ差出ス免税郵便物ハ宿所氏名ヲ記載スヘシ

第四十三條 免税郵便物ニ他ノ音信文或ハ暗號隱語ヲ記載シ又ハ有税郵便物ヲ附シタルモノハ相當種類ノ郵便税ヲ徴収スヘシ

第五章 書留郵便

第四十四條 書留郵便物ハ郵便局ノ帳簿ニ登記シ遞送ス

配達ノ受授ヲ証スルモノトス

第四十五條 書留手數料ハ郵便物ノ何種ニ拘ハラス六錢トス

第四十六條 書留郵便物ハ郵便税手數料共前納ニ限ルヘシ

第四十七條 書留手數料ハ郵便切手ヲ其郵便物ニ貼付シタルヲ以テ之ヲ納メタルモノトス

第四十八條 書留郵便物ヲ差出ストキハ其表面ニ書留ト記載シ郵便局若クハ郵便受取所ニ於テ之ヲ主務者ニ交付シ印刷シタル式紙ニ郵便局若クハ郵便受取所

ノ印及主務者ノ印ヲ捺セル受取証書ヲ受領スヘシ

第四十九條 書留郵便物ノ配達ヲ受ケタルモノハ其差出人及受取人ノ氏名配達ノ年月日ヲ記シタル受取証

書ニ調印スヘシ本人不在ナルトキハ其代人記名調印スヘシ

第五十條 免税郵便物ハ書留手數料ヲ納ムルニ及ハス

第六章 郵便物遞送配達

第五十一條 郵便物遞送配達ハ郵便局ニ於テ之ヲ管スルモノトス

第五十二條 郵便局ノ廢置ハ驛遞總官新聞紙ヲ以テ之ヲ公告スヘシ

第五十三條 郵便物ハ其宛名ノ家ニ配達シ二名以上ニ宛タルモノハ其内ノ一名ニ配達スヘシ肩書寄附所ノ類以下之ニ倣フアルモノハ其肩書ノ家ニ配達スヘシ

第五十四條 完納税郵便物宛名ノ家ニ於テハ其配達ヲ拒ムヘカラス免税郵便物亦同シ但市外別配達料解船

料貨幣遞送配達賃ニ追納アルモノハ此限ニアラス

第五十五條 未納稅又ハ不足稅ノ郵便物受取人ニ於テ其稅ヲ納メサルトキハ之ヲ受取ルヲ得ス

第五十六條 郵便物ヲ開封シ又ハ其帶紙或ハ結束ヲ脱シ或ハ音信文ヲ讀過スルトキハ之ヲ受取リタルモノトナスヘシ但第百十五條ノ郵便物ハ此限ニアラス

第五十七條 郵便物配達ヲ受ケタル肩書ノ家ニ於テ其受取人移轉シタルトキハ直ニ之ヲ其配達人ニ還付スルカ或ハ其郵便物ニ加記又ハ附箋シ再ヒ郵便ニ出スヘシ但受取人ニ達スル爲メ其家ニ留メ置クモ日數三十日ニ過クヘカラス

第五十八條 其家ニ屬セサル郵便物ノ配達ヲ受ケタルトキハ其由ヲ附箋シ速ニ之ヲ郵便ニ出スヘシ

其郵便物ヲ誤テ開封シタルトキハ更ニ封緘シ其事由ヲ副書シ速ニ之ヲ郵便ニ出スヘシ

第五十九條 配達シ能ハス或ハ未納稅又ハ不足稅ヲ受取人ニ於テ納メサル郵便物ハ之ヲ其差出人ニ還付スヘシ但二名以上ニリ差出シタルモノハ之ヲ其内ノ一名ニ還付スヘシ

第六十條 第十三條第十四條第十五條ニ背戻スル郵便物ハ之ヲ差出人ニ還付スヘシ

第六十一條 差立前ニ係ル郵便物ハ差出人ノ請求ニ依リ之ヲ還付スルコトアルヘシ

第六十二條 第四種郵便物ハ次便ヲ以テ遞送スルコトアルヘシ

第六十三條 遞送及集配ノ途中ニ係ル郵便物ハ其郵便